

# MUSEUM & LIBRARY

## 山口県大学 ML (Museum・Library) 連携事業報告

平成29年度特別展

『やまぐちの大学

～ University College Yamaguchi ～』

シンポジウム

『あなたの街の大学博物館・図書館

～目的と役割・現状と未来～』



山口県大学 ML (Museum・Library) 連携事業報告

平成29年度 特別展・シンポジウム

山口県大学 ML 連携事業 web <http://www.oai.yamaguchi-u.ac.jp/ml/>

【編集・発行】

山口県大学 ML 連携事業事務局

〒753-8511 山口市吉田 1677-1

電話 083-933-5192

e-mail [li322@yamaguchi-u.ac.jp](mailto:li322@yamaguchi-u.ac.jp)



平成29年度 文化庁

地域の核となる

美術館・博物館支援事業 2018.3.31

### 事業の経緯と経過

平成29年度は、参加館が共通テーマに沿って各大学や館の特色を活かした学術資料または研究成果の展示を開催するという現行体制での5年目となることを記念し、山口県立山口博物館の共催による初の集合展示を開催することとなった。参加館数は13大学17館（下記「事業の実施体制」参照）となった。

各地区での事業説明会を、宇部地区では平成29年6月22日に山陽小野田市立山口東京理科大学にて、山口・萩以東地区では6月27日に山口大学総合図書館にて、下関地区では6月28日に下関市立大学にて開催し、

◎展示テーマを『やまぐちの大学 ～University College Yamaguchi～』とする

◎事業期間は11月25日から12月24日までとする

◎開催にあたり、オープニングセレモニーを実施する

◎会期中の土日には、参加館から会場当番員を配置する

◎関連事業として、会期中にシンポジウムを開催する

などが決定された。

以降、各館の展示準備とともにポスター、会場配付パンフレットなどを作成し、広報物配付後は事務局とともに各館による地域広報活動が進められた。

平成29年11月25日、「山口県大学ML連携特別展」は開幕し、1ヶ月の会期中、推定600名程度（県立博物館常設展示館者数等から推計）の方々に見学いただいた。関連事業として平成29年12月10日に開催したシンポジウムにおいても、一般市民を含め約40名の参加者があった。

次頁より、特別展の概要およびシンポジウムの実施報告を行う。また、本事業報告書の作成後には事業報告会の開催が予定されている。

なお、前年度までの報告会における検討を受けて、今年度においては文化庁による平成29年度文化芸術振興費補助金（地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業）に申請し、補助対象事業となった。

### 事業の実施体制

#### ・主催

山口県大学ML連携事業実行委員会

実行委員長 根ヶ山徹

事務局代表 永久英雄

事務担当 川上誠

#### ・参加館

岩国短期大学付属図書館 宇部フロンティア大学短期大学部図書館 宇部フロンティア大学附属図書館

山陽小野田市立山口東京理科大学図書館 至誠館大学附属図書館 下関市立大学附属図書館

下関短期大学図書館 水産大学校図書館 東亜大学附属図書館 徳山大学図書館

山口学芸大学・山口芸術短期大学図書館 山口県立大学図書館 山口大学医学部図書館

山口大学工学部図書館 山口大学総合図書館 山口大学埋蔵文化財資料館 山口短期大学図書館

（50音順）

#### ・共催

山口県立山口博物館 大学リーグやまぐち 山口県大学図書館協議会

#### ・後援

山口県博物館協会 大学博物館等協議会 山口県図書館協会

・平成29年度 文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業



平成 29 年度 山口県大学 ML 連携特別展  
『やまぐちの大学 - University College Yamaguchi -』 事業概要

---

【経緯】

山口県大学 ML（ミュージアム・ライブラリー）連携事業は、平成23年度に活動を開始した全国でも稀少な広域大学連携展示活動である。発足当初は学内に博物館・図書館を有する県内2大学（山口大学・梅光学院大学）にて県内を巡回する展示活動を開始したが、平成 25 年度以降は一定期間共通テーマに即した学術資料展示を実施する形態とし、県域全大学図書館に参加を呼びかけた。平成28年度現在、12大学17館が参加している。

平成29年度は、現行体制となり5周年を迎える。全国でも稀有な当活動をさらに県民に周知させるため、山口県立山口博物館を借用し、初の県内大学合同学術資料展示を実施する。

【目的】

山口県内大学の博物館・図書館等に所蔵される学術資料、研究成果や大学史等は、各大学の教育・研究理念を反映したものであり、地域の文化遺産とも言える。これらを同時に公開することによって、観覧者は当県の高等教育機関の特色を理解することになり、地域活性化につながるものと考ええる。

【事業詳細】

開催期間：平成29年11月25日（土）～12月24日（日）

設営期間：平成29年11月20日（月）～11月24日（金）

撤収期間：平成29年12月25日（月）～12月27日（水）

会場：山口県立山口博物館

予算：大学リーグやまぐち交付金、文化芸術振興費補助金

設営撤収：各大学参加館による



オープニングセレモニー テープカットの様子



特別展会場入口



展示風景



展示風景

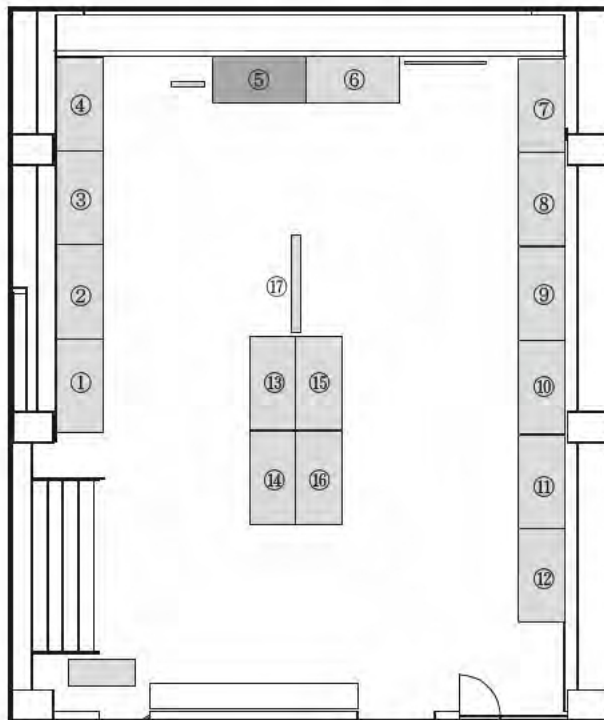
# ～展示品目録～

(参加館名50音順)

参加館名	展示品
岩国短期大学 付属図書館	『復刻 幼児の教育』
	『赤い鳥 復刻版』
	松谷みよ子作品研究
	『ちいさいモモちゃん』
	絵本100冊読み読書ノート
	飛び出すカード
	手作り絵本
宇部フロンティア大学短期大学部 図書館	金魚1
	金魚2
	関連資料 図書6点
	関連資料 パネル
宇部フロンティア大学 附属図書館	香川昌子作 日本画下絵
	香川昌子作「よだれかけ」
	香川昌子作 色絵
	香川昌子愛用「手あぶり」
	掛け軸
山陽小野田市立山口東京理科大学 図書館	セラミックスターボチャージャー
	技術者用計算尺
	薬学部校舎模型
	「東京の地中温度」パネル
	「六分儀を用ひすして経緯度を測定する法」パネル
	「液晶配向ラビングマシン」パネル
	「山陽小野田市立山口東京理科大学年表」パネル
	「日本で最初に成功した液晶表示」パネル
至誠館大学 附属図書館	『知・地による地域活性化支援 ～夢プランの作成と実施～』パネル
下関市立大学 附属図書館・鯨資料室	日新丸積量図（レプリカ）
	昭和拾貳年度鯨油製造統計表
	昭和十五年 / 十六年度漁場日誌
	海洋漁業 第四巻 第八号 八月号
下関短期大学 図書館	(赤間関硯) 堀尾卓司作「波濤（なみ）」
	(赤間関硯) 堀尾卓司作「かほ（顔）」
	「かほ（顔）」制作のための原寸大図面（複製）
	「かほ（顔）」制作のためのデッサン（複製）
水産大学校 図書館	3代目練習船「耕洋丸」模型
東亜大学 附属図書館	周防長門十四郡高辻絵図（複製品）
徳山大学 図書館	国宝鳥獣人物戯画（レプリカ）
	昭和30年代に刊行されはじめた週刊マンガ雑誌
山口学芸大学・山口芸術短期大学 図書館	フジ（吉村芳生作）
	自主作成組曲『吉田松陰』
	自主作成組曲『香月泰男』
	山口芸術短期大学定期演奏会ポスター&パンフレット一覧
	創作絵本『みかちゃんと5つのつぼみ』
山口県立大学 図書館	弓・矢
	石斧
	首飾り
	口琴
山口大学 医学部図書館	薬研
	医療器械函（大）
	医療器械函（中）
	往診用薬籠
	聴診器
山口大学 工学部図書館	化学天秤
	湯川秀樹博士の色紙
山口大学 総合図書館	明倫館文庫『重刊鮑氏戦国策』
	山口高等学校の教師たちの名刺判肖像写真
	山口高等学校全景の乾板 明治20年頃（レプリカ）
山口大学 埋蔵文化財資料館	「千字文」音義木簡（レプリカ）
	墨書須恵器「官」
	墨書須恵器「少殿」
	石製帯飾り「丸軀」
	銅製帯飾り「丸軀」
	帯尻金具「蛇尾」未製品
山口短期大学 図書館	情報メディア学科学生作品 ロボット
	児童教育学科初等教育学専攻学生作品 陶芸
	児童教育学科初等教育学専攻学生作品 絵画



## 展示会場配置図



- ①山口大学 総合図書館
- ②山口大学 医学部図書館
- ③山口大学 埋蔵文化財資料館
- ④山口県立大学 図書館
- ⑤水産大学校 図書館
- ⑥下関市立大学 附属図書館・鯨資料室
- ⑦岩国短期大学 付属図書館
- ⑧山口短期大学 図書館
- ⑨山口学芸大学 山口芸術短期大学 図書館
- ⑩宇部フロンティア大学 附属図書館
- ⑪宇部フロンティア大学 短期大学部図書館
- ⑫下関短期大学 図書館
- ⑬山口大学 工学部図書館
- ⑭山陽小野田市立山口東京理科大学 図書館
- ⑮徳山大学 図書館
- ⑯東亜大学 附属図書館
- ⑰至誠館大学 附属図書館

### 【実施の報告】

平成29年11月25日、予定通り特別展は開幕した。初日にはオープニングセレモニーを実施し、事業実行委員会委員、参加館関係者をはじめ約40名の出席があった。展示会場が山口県立山口博物館 常設展示会場の一角ということもあり、来場者数の正確な把握はできないものの、期間中には近隣高校生による展示見学も含め、推定およそ600名の来場者に見学いただけた。

事業全体の課題は第一に広報の不足が挙げられる。5周年記念事業でありながら、事務局からマスコミへの情報発信等が効果的に行えず、結果として観覧者数の低迷につながった。

### 【来場者の声】

会期中にはアンケートを実施し、21件の回答があった。

「興味深い展示であった」「各大学の特色が分かって良かった」等の好意的な意見もあったが、一方で「意外なほどに小規模であった」「もっと宣伝した方がよい」等の厳しい意見もあり、今後の活動体制について検討の必要性が感じられた。



展示観覧風景



高校生による展示見学

山口県大学 ML 連携事業シンポジウム  
『あなたの街の大学博物館・図書館 ～目的と役割、現状と未来～』実施報告

---

【概要と目的】

地域と大学との関わりにおいて、大学博物館・図書館が果たすべき責務と期待される役割について討議する。

山口県 ML 連携事業が当初目指していたものは、地域住民が各大学の特色ある学術資料や研究成果に接する機会を創出すること、大学をより身近に感じてもらうこと、であった。本シンポジウムでは、まず原点に立ち返り、各大学の保有する学術資源の紹介や公開方法、管理状況、資源を活用した地域貢献活動についての事例紹介を行う。

事例紹介の中では、具体的な公開等の実施事例のほか、学術資料を保有してはいるものの十分な利活用を行っていない状況なども立ち現れてくるであろう。そこで、各大学における学術資料管理・利活用・公開の状況や大学博物館・図書館が果たすべき役割について、人的資源・体制、具体的な取り組みなど様々な側面から、また博物館・図書館職員、研究者、一般の方々など様々な視点から検討を行うとともに、会場内で意見交換を行う。

こうしたプロセスを経て本シンポジウムでは、大学博物館・図書館に期待される役割とはどのようなものであるか、地域に対していかなる貢献を行えるのか、その役割を果たすため体制強化していく必要があること、そして本事業の継続の必要性を提起する場としたい。

【開催内容】

会場：山口県立山口図書館レクチャールーム

日時：平成 29 年 12 月 10 日（日）13：00～16：00

スケジュール・登壇者

13：00～ 代表挨拶（山口県大学ML連携事業実行委員会 根ヶ山徹委員長）

13：05～ 山口県大学ML連携事業の経緯（山口大学埋蔵文化財資料館 横山 成己）

13：15～ 基調講演

梅光学院大学 特任准教授 吉光 紀行

広島大学総合博物館 准教授 清水 則雄

13：55～ 各館事例報告

山口大学総合図書館 日高 友江

山口県立大学図書館 町田 敬一郎

至誠館大学附属図書館 藤本 夏美

山口大学埋蔵文化財資料館 横山 成己

下関市立大学経鯨資料室 岸本 充弘

14：40～ 意見交換

16：00 閉会

【参加者数】

約40名（一般市民を含む）



シンポジウム会場の様子



シンポジウム会場の様子



## 1. 代表挨拶

(山口県大学ML連携事業実行委員会 根ヶ山徹委員長)

高いところから失礼いたします。皆さんこんにちは。山口大学副学長根ヶ山と申します。本日はお休みのところ、また年末のご多用中、さらには足元のお悪い中、山口県大学ML連携事業シンポジウム『あなたの街の大学博物館・図書館』にお運びいただきまして誠にありがとうございます。開催にあたりまして、実行委員会を代表いたしまして一言ご挨拶申し上げます。

本日のシンポジウムでは、大学の地域貢献が求められる昨今の情勢の中、大学博物館・図書館が果たすべき責任、期待される役割を考え、現状の課題等を見据えながら、今後いかにあるべきかを考えていきたいと思っております。このことは、それぞれの大学あるいは様々な場におきまして、折に触れて議論されてきたテーマであろうと思われそうですが、これまではどちらかと言いますと現状把握、あるいは直面する課題への対応に重点が置かれていたように思います。本日のシンポジウムでは、現状把握はもちろんのこと、現状の十分な理解に基づきまして、今後、具体的にどのように対処すべきか、その可能性につきまして話し合いができたかと考えております。サブタイトルに『目的と役割・現状と未来』と題した所以でございます。

本日はまず、博物館・図書館それぞれの立場から、求められる責任、期待される役割についてのご講演をお願いいたしまして、引き続き現場スタッフの方から事例報告を行っていただく、という形を取らせていただきます。およそ大学によって事情が異なることは十分に承知しておりますけれども、議論が一層深まりますよう、ご出席の皆様方にはぜひとも忌憚ないご意見をいただきますようお願いいたします。

最後になりましたけれども、シンポジウム開催にあたりまして会場のご提供をいただきました山口県立山口図書館の松永館長、また準備等にご尽力をいただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。本日のシンポジウムが充実した内容で、活発な議論が交わされ、ご出席の皆様にとって有益なものになることを願いつつ、甚だ簡単ではございますが、開会のご挨拶といたします。どうもありがとうございました。



## 2. 『山口県大学ML連携事業の経緯』

(山口大学埋蔵文化財資料館 助教 横山 成己)

山口大学埋蔵文化財資料館の横山と申します。本日はよろしくお願ひします。私からはごく簡単に、山口県大学ML連携事業の経緯説明をさせていただきます。

まず、この取り組みの最初の活動は、図書館は関わっておらず、平成22年度に大学博物館連携という形態で始まりました。事業内容は、山口大学埋蔵文化財資料館と梅光学院大学博物館2館がお互いの所蔵品の交換展示を行うというものでした。この事業を実施することによって、県央部にある山口大学の所蔵品が県西部にある梅光学院大学において、また県西部にある梅光学院大学博物館の所蔵品が県央部で公開される。大学広報としての効果も目的として実施された事業でした。

翌平成23年度に至り、梅光学院大学博物館と今後の事業展開を考えるととなりましたが、やはり2つの博物館だけで継続的な事業展開は困難という結論になりました。そして、博物館と異なり、大学には必ず図書館があることから、博物館と図書館の連携事業という形で事業を拡大していこうと考えました。梅光学院大学博物館・図書館、そして山口大学埋蔵文化財資料館と図書館の4館が、所蔵する貴重な学術資料等の展示を構築し、県内を巡回する。そこまでは話を進行させていたのですが、その矢先の平成23年3月11日、ご存知のように東日本大震災が起きました。日本の危機的状況において、我々大学はのうのうと学術資料展示をやっているのかという思いもありました。東日本に対して、山口





県は本州の西端部にある。そういう地理的な特徴からも、東日本大震災をきちんと支援する活動も必要ということから、展示タイトルに『風化させない記憶への一步』、つまり東日本大震災を忘れないぞ、というメッセージを込めました。また、梅光学院大学の東北ボランティア実行委員会というグループが実際に震災被災地に行って支援を行ったので、4館にこの1グループを加えて巡回展示を行うことになりました。展示は震災の1年後、平成24年3月11日から、山口大学会場を皮切りに梅光学院大学会場、徳山大学会場、山口福祉文化大学（現至誠館大学）会場の4会場を巡回しました。さらに、会場において被災地へのメッセージと、義援金を募りました。そして、巡回終了した後に参加館の代表者が被災地の大学へ行き、その事業成果報告をさせていただくとともに各大学図書館・博物館の被災状況の視察を行いました。義援金については最終的に103,000円ほど集まりましたので、文化財保護・芸術研究助成財団に寄付をさせていただきました。

通常ですと、このように大規模な事業になりますと燃え尽き症候群とも言いますか、一度事業をやめる方向になりがちなのですが、我々はさらにもう一步、事業を拡大させる方向に足を踏み入れました。それが現行の県内全大学参加型山口県大学博物館・図書館連携、いわゆる山口県大学ML連携事業です。この事業は、各参加館が所蔵している貴重学術資料や研究成果を各館で、一定期間を設け展示するという取り組みです。同時に各館、各大学を市民の皆さまに巡っていただくことを目的にスタンプラリーも開催しました。当初は多数参加してくれるのではないかと考えまして、6館達成でエコバッグ、12館達成で手ぬぐいプレゼントという形で実施しましたが、少しハードルが高く達成するのが難しいとのことで、翌年度よりコットンバッグは4館達成、手ぬぐいは8館達成に変更しました。

参加館の状況については、全大学参加型初年度、平成25年度は9大学12館が参加しています。翌平成26年度は11大学15館。徐々に参加館が増えてきて、全大学参加型ML連携事業が5周年を迎えるに至りました。

5周年という記念の年を迎えますので、今回は山口県立山口博物館にご協力いただき、参加館が1か所に集まって貴重な学術資料等を展示するという取り組みを行うことになりました。11月25日にオープンし、今月24日まで県立博物館で開催しております。我々としては、この5周年をもちまして山口県内全大学の参加を目指す、という方向性をもって動いていましたが、残念ながら設立当初のメンバーである梅光学院大学が諸事情により参加不能ということになりましたので、13大学17館の参加で開催させていただいています。伴いまして、5周年を記念して、当シンポジウム、『あなたの街の大学博物館・図書館』を開催させていただくことになりました。経緯説明は以上になります。



### 3. 基調講演『大学図書館の目的と役割～地域への貢献～』 (梅光学院大学文学部 特任准教授 吉光 紀行)

梅光学院大学の吉光と申します。一昨年までは、実は山口大学の図書館で仕事していました。現在は第二の職場ということで、梅光学院大学で図書館学関係の授業を担当しております。今までの経験をもとに少しお話しできることがあればということで、大学図書館の目的と役割、特に地域貢献との位置づけを少し話させていただこうかということを考えております。

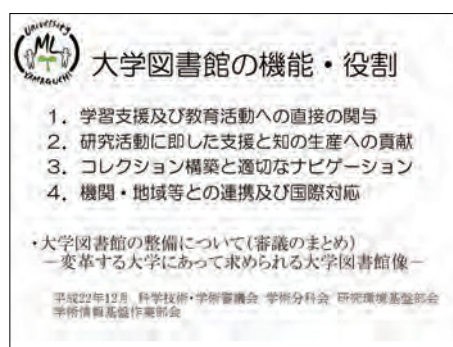
まずその前に図書館というもののですが、図書館は館種、要するに設置母体によっていくつかの分け方ができます。1つは「国立図書館」と言われているもの。それから、いわゆる皆さんがよくご存知の「公共図書館」。それから「大学図書館」。それから「学校図書館」と「専門図書館」。大きく5つぐらいに分けられるということです。特に公共図書館については、皆さんがよくご存知の公共図書館は、公立図書館のことです。実は公共図書館のなかには私立図書館があるのをご存知でしょうか。私立図書館も公共図書館のひとつとしてカテゴライズされています。私立図書館については赤十字社、それから法人、社団法人とか、そういったところで設置された図書館のことを言うんですが、いわゆる大きく分けると館種としては5つということになります。

それぞれの図書館はいろいろな形で規定されておりまして、国立図書館は、これは世界的にもそうなんですが、必ず一国に一個ということで作られています。日本ですと国立国会図書館がそれに当たります。国立図書館の国立国会図書館は、国立国会図書館法で規定されておりまして、今現在3つあります。東京にあります本館と、京都にあります関西館。それと国際子ども図書館という、主に3つの図書館で国立図書館が構成されています。公共図書館については図書館法という独立した法律があり、それで規定されています。大学図書館は、実は図書館に関する直接的な法律はありませんが、大学設置基準の中に大学図書館のことが記述されています。学校図書館は小学校・中学校・高等学校等にある図書館のことで、学校図書館法という法律で規定されています。それから専門図書館ですが、議会の図書館や、研究所等の図書館が専門図書館にあたります。

サービスの対象は、国立図書館はいわゆる国立ですので、国民全体がサービス対象になります。公共図書館におきましては地域の住民、都道府県立図書館と市区町村立図書館とでは少し役目が違いますが、いわゆる住民がサービス対象になっています。それから、今からお話しします大学図書館につきましては、学生の教育、教員の研究がサービス対象とされております。学校図書館につきましては、もちろん小学校・中学校・高等学校ですから、児童生徒の学習、教員の教育支援が主なサービスとなっています。専門図書館は先ほども言いましたが、企業、研究所関係の図書館、議会図書館などが専門図書館という位置づけになっており、図書館はこのように5つの種類に分類されるということです。

このような話をずっとしていると30分や40分はすぐ経ちますので、そういうことを一応念頭に置きまして、では大学図書館の機能と役割ということ考えた時に、参考になるのが平成22年12月に科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会が『大学図書館の整備について（審議のまとめ）』というものを出力しており、特にこういう情報化社会、変化のある社会の中で変革する大学にあって、大学図書館像というものをもとめております。その中では「学習支援及び教育活動への直接関与」、「研究活動の着実な支援と知の生産への貢献」、「コレクション構築と適切なナビゲーション」、それから4番目として「機関・地域等との連携及び国際対応」の、4つの大きな役割が示されております。

少し具体的なことを申しますと、「学術支援・教育活動」としてはラーニングコモンズ。ラーニングコモンズというのは新しい考え方ではないのですが、もともと情報リテラシーの育成ということから考えられ、情報技術教育と関係が深いものです。それから特に教育研究支援の観点からレファレンスサービスの充実ということが言われています。そしてe-ラーニングへの貢献ということですね。「研究活動」に関しては最近流行りのデジタル化が進んでおりまして、e-サイエンスや、後でも出てきますが学術機関リポジトリ、いわゆるオープンアクセス。無料で大学研究活動を公開しようという取り組みのことで、リポジトリというのはネットワーク上に置かれている電子的な書庫というシステムになります。3番目の「コレクション構築と適切なナビゲーション」につきましては、電子化されている学術情報へのアクセ

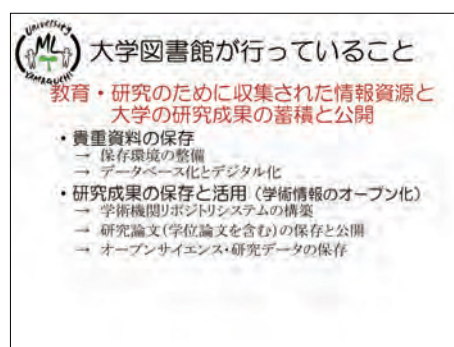




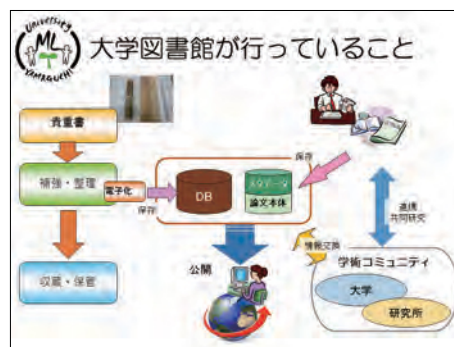
スということで、特に電子ジャーナル、データベース、電子書籍がこれにあたります。特に学術雑誌の多くは電子ジャーナルとして、ネットワークを介して読むことができる形になっております。また、学術情報の効率的なアクセス、いろいろなものを探するときの方法としてディスカバリーシステムという、一括で検索できる機能も最近できつつあります。今日お話しするのは4つ目の「他機関・地域との連携協力、国際対応」というところですが、ML連携はこれにあたります。ここではMLですけども、MLAというものもあります。このMはもちろんMuseum、それからLはLibrary。AはArchiveということで、ML連携とアーカイブ、それから公共図書館の連携。国際対応につきましては国際競争力の向上とか、海外の大学図書館との連携というものが示されています。

地域にとって大学図書館というものがどうかかわるのか。その前に、そもそも大学や図書館が持っている資料の位置づけを少しお話ししたいと思います。図書館は収集・整理・保存・提供という4つの大きな機能を持っており、その時に収集された資料の取り扱いですが、基本的には、収集した情報資源は大学の所有物ではありません。公共図書館でも多分そうだと思うのですが、所有物ではないんです。実はこれは国民、さらには地球人の共有財産ということで、預かっているだけだと思っています。なぜかという、少なくとも、すべての情報というのは利用者のニーズによって置いているということですので、情報資源というのは預かっているだけで、もちろんそれを提供する義務も当然あります。

大学図書館が行っていることは、教育・研究用に収集された資料とか、大学で行われた研究成果の公開。大学ですので学生・教員の教育・研究がベースなので、その結果として生まれてきたものをちゃんと収集して、それを提供する、公開するというものが役割としてあります。また、研究上に集められた貴重資料についても保存環境の整備をしたり、それからデータベース化、デジタル化して公開の準備をしたりということもあります。また研究成果の保存と活用として学術機関リポジトリシステムの構築、これは先生方の研究成果をシステムに入れて、公開しようというもので、図書館のホームページから公開しています。それから学位規則も変わって、学位論文（博士論文）の保存・公開は各大学でやりなさいということで、学術機関リポジトリを活用して保存と公開をしています。さらにオープンサイエンス。研究するためには論文だけではなくて、研究材料の保存も当然する必要があります、こういうことにも大学図書館は関わっています。図式化するとこのような感じになります。



では、大学図書館が地域貢献としてできることは何があるか。もともと大学図書館というのは利用対象が大学の教育・研究ですが、その成果としての情報を蓄積して公開することで、間接的ではありますが、情報基盤として地域を支える役割を担うということが大学図書館にできることではないかと思われます。また、地域の課題解決に向けた情報の提供とか、機関リポジトリ技術を活用した地域情報の電子化・保存技術、こういうノウハウを提供すること。それから研究者と地域をつなぐコーディネーターの役割。また先ほど言いました図書館の地域開放などですね。山口大学図書館も年間1万数千件の貸出等で使われているようです。



このように、大学図書館というのは間接的ではありますが地域への貢献のためにも、ちゃんとした資料の収集・保存、それから公開するためのインフラ作りをしています。ところが、これは現状と課題になると思うのですが、実は図書館の専従職員は、15年間の間に半分くらい減っているということが実態としてあります。資料費もかなり減ってしまっていて、どちらかというと昨今理系重視というところがあって、特に雑誌、電子ジャーナルの経費等々は増えているが、図書館資料としての冊子の方はだんだん減っている状況です。図書の購入冊数も15年間で30%減っています。このような実情の中で大学図書館は教育・研究に対して大変苦慮しています。何かしようとしても必ずコストが付きまといま。だけでも、人が減っていく、でもサービスを低下させるわけにいかないということもあって、図書館職員に結構な負担がかかっていることが想像できます。

大学図書館の未来はどうかというと、大学設置基準の中には大学の専用施設の一つとして図書館は位置付けられていますので、どちらかというと大学の未来に左右され、影響を受けやすいというのは仕方ありません。ただし、学校教育法の113条に「大学は教育研究の成果普及および活用の促進に資するため、その教育研究活動の状況を公表するものとする」という記述があるように、この「～公表するものとする。」というところが地域貢献に直接関わるところではないかと想像しております。そのため地域貢献における図書館の使命は、教育研究成果の保存と利活用



が特に求められているということではないかと思えます。しかし実際、先ほど申しましたように何をするにもコストというのが当然かかります。大学によって図書館も左右されます。しかし、逆に言うと図書館によっても大学が左右されるかもしれない。現状としてお金は減っているしそれにより資料の状況も変わっていきますが、図書館情報の利活用には人材が必要であり、人材がいないと図書館情報の価値も半減すると思われまます。したがって人によっても大学図書館の未来は左右されると私は考えています。いろいろな課題はあるにしろ、特にコスト削減ということが最近よく言われていますが、削減できるところとできないところがあります。どのようにしても人材育成には年数がかかります。そういう面では大学図書館においても、地域貢献においても人材の確保というのが最重要課題ではないかと、私としては思っているところです。大学図書館の行く末というのは、少し心配はしていますが、今後の情報化社会、それから日本の学術情報のことを考えますと、こういうこともしっかり考えていくべきではないかと思っています。ありがとうございました。

#### 4. 基調講演『大学博物館の目的と役割 ～地域への貢献～』

(広島大学総合博物館 准教授 清水 則雄)



皆さんこんにちは。広島大学総合博物館より参りました清水と申します。本日はこのような会にお呼びいただきまして誠にありがとうございます。私は『大学博物館の目的と役割 地域への貢献』と題しましてお話をさせていただきます。ちなみに、ここにおりますカエル、知っている方はいらっしゃるでしょうか。いらっしゃると思うのですが、広島大学総合博物館のマスコットキャラクター、ヒロッグくんと言いますのでぜひ覚えておいてください。ちなみにインターネットゆるキャラランキングというものに昔、参加しました。11位。微妙な位置かなというところですが、まあ大健闘だなと私は個人的に思っています。商標登録もしました。

まず最初にですね、皆さんおそらく大学博物館についてなじみがないと思いますので当館の紹介からさせていただきます。さっそくヒロッグが入館しようとしています、広島大学総合博物館、東広島市に所在しています。このように二階建てで立派なように見えますが、実は一階のみでございます。この鉄板が貼られているところのみで、二階は教育学部の講義室になっています。すごい小さい博物館、250㎡、この部屋くらいですね、約1,000点の標本や展示物を展示している博物館になります。

会場の中で広島大学東広島キャンパスに行かれたことのある方いらっしゃるでしょうか。印象とか、どうでしたか。(会場：

「広いですね」) そうですね、広いですね。実際、この赤い破線がキャンパスでございます。ちょっと皆さんに質問させてください。この中に東京ドームや有名なカープのマツダスタジアムが、いったい何個入ると思いますか。5個、25個、50個でいきましょう。5個だと思われる方? 25個だと思われる方? 大体ですね、3択すると日本人は真ん中を選ぶ傾向がございますが、50個だと思われる方? 素晴らしいですね。この前振りがちょっと良くなかったですかね。もうネタバレで、実は東京ドーム50個分になります。キャンパス単体で言いますと実は日本で3番目に大きいキャンパスになります。このように、自然区、山とか池とか川ですね、農場もございます。この中に、広島大学総合博物館の本館を2006年に我々はオープンさせて、その他に学部サテライトという分館をいま5つ設置しています。この中には埋蔵文化財調査部門サテライトであったり中央図書館サテライトであったり、理系文系等々のサテライト、つまり小さな分館を持っております。さらに絶滅危惧動植物がたくさんいる。ご覧頂ければわかるように山ですからたくさんの生物が生息しています。博物館が開館した2006年当初は約30種類の絶滅危惧植物が知られていましたが、現在までの調査で約50種類以上の絶滅危惧動植物が確認されています。この数は日本の大学キャンパスでは一番です。我々はそういった動植物も展示物だろうということで、「発見の小径」という自然散策路を作っております。ですので、本館ーサテライトー小径を合わせて「キャンパス丸ごとが博物館」なのです。小さい博物館ですが、見た目は日本一大きな大学博物館になっ



てしまう。このような活動を繰り返し広げております。発見の小径を歩くためのこういった自然散策マップも作っております。キャンパスの中には日本最小のトンボ、ハッチョウトンボであったり、ゲンジボタル、ギフチョウという絶滅危惧種ですね、サイジョウコウホネという植物は広大な教員が新種登録して世界でも西条盆地でしか見ることができない植物ですね。こういったものすべてが展示物。裏返せば大学を歩いている教員もみな展示物です。この形は「エコミュージアム」、「現地保存型野外博物館」とも言われます。無柵境界の中にコア博物館がありまして、遺産がある。実は私たちの場合、31個の先史から鎌倉時代までの遺跡もキャンパス内から出土しています。そういったものも展示物。さらに学部にはサテライト。そこに来訪者が訪れ、普通は住民が案内をしてくれますが、大学の場合は学生が案内をしてくれます。キャンパスガイドという制度です。

我々はこのようなエコミュージアムを展開しながら、地域に開かれた博物館として地域重視で活動しています。地元の自然をテーマにした里海・里山に関する常設展示、地域性を重視した企画展示等々ですね。出前博物館も地域でどんどん実施しています。あとは、広島大学地域貢献研究という助成制度にも積極的に応募して、地域貢献を博物館活動の核として11年の活動を行ってきています。

そもそも、博物館の種類は幅広いですね。皆さんがよくご存知の歴史館、美術館あと自然史博物館、科学館。なんと水族館、動植物園も博物館に入ってしまう。多様すぎてわけがわからないですね。なので博物館関係者が一堂に会す学会は混沌としています。もう事情が違いすぎて議論にならないことも多いですが、実際5,747館が平成23年の時点で存在しています。現在約6,000館を超えていると言われております。この中で大学博物館とは?ということなのですが、大学博物館の設立の経緯を見てみますと、大学博物館の始まりは1996年に学術審議会が「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」という報告をいたしました。要する



に、いろんな大学に資料館とか調査室があったのですが、競争的資金を準備するので、頑張りたいところは博物館にしていいますよ、と言ったわけです。そこで、当時の文部省から大型予算を獲得、一説には5億円以上いただいて、既存の資料館などを発展させて設立したわけです。東京大学、京都大学は50億円もの予算を獲得したとも言われています。東北大学、北海道大学、九州大学、名古屋大学、鹿児島大学、大阪大学。大阪大学で8億円と聞いていますね。ちなみに、広島大学総合博物館は2,400万円です。文部省から競争的資金を獲得できた大学博物館を第1世代とします。第2世代の大学博物館は、我々もそこに入るのですが、大学の独立行政法人化以降、大学の独自性が強まった。実は広島大学は（第一世代の設立時に）鹿児島大学と競争して敗れておりました。ですので、博物館を創りたかったけれどできなかった。そこで、大学の独自の予算で学内措置でやっぱり創ろうということで、再び設立の動きがあり、そして2006年に設立されました。このような形で、広島、愛媛、香川、佐賀。私立大でもどんどんできています。いま258館程度、大学博物館があると言われております。多くの他の公立等の博物館群と大学博物館が一番異なる点はですね、大学はやはり教育研究により蓄積された膨大な学術標本・研究成果を保有するということです。国民の皆さんの血税で行った研究で生まれた学術標本が眠っています。九州大学で約750万点。東京大学で500万点。広島大学に至っては調査さえされていなかったのでは何点あるかも分からなかった。どうも被爆して疎開したのでかなり失われていたというのはよく分かっておりました。

大学博物館の機能と役割としてはこういった標本群を用いて、研究を推進する。そして、そういったものの調査・収集・保存・管理を学内に呼び掛けてですね、それを用いて学内的には体験型実証型教育として授業で活用する。さらにこれを市民に向かって学外的には展示をして情報発信をしていく、その中で社会連携を推進して双方向の連携を行っていくじゃないか。こういった機能を、大学博物館は持っています。簡単に言いますと、学術標本を管理して、社会に発信する装置。地域と大学の架け橋。それが大学博物館と言われている。



当館の概要でございますが、2006年11月にオープンをしました。館長は併任の先生で、展示情報研究企画部門のメンバーだけですと、当時は助教1名学芸職員1名事務補佐員1名、計3名。年間予算約300万円ですね。今は少し大きくなりました。私は学芸職員で就職したんですが、学芸員教育を行うことを目的として、埋蔵文化財調査室と統合改組して少し大きくなりました。このように4名のメンバーが所属しています。そして、先ほどのキャンパスまると博物館構想を推進しています。当時の学長がですね、2,400万円を



出してくれました。旧帝大のような大きな博物館は建てられないけれども、同じような博物館になってくれと仰いました。なかなか酷なことを仰った。面積は概ね約10倍、スタッフも教員で5～10人程度は在籍しています。「小さく産んで大きく育て欲しい」と。うーんと思いましたが、では、旧帝大に伍する博物館、我々の発想では、見た目は大きな博物館にしようじゃないか。キャンパスまわごと博物館構想ですね。これが実際の博物館の本館です。一番最初の部分が大学紹介、次が宇宙・地球ゾーンですね。化石をたくさん保有していますので、そういったものを触れる形で展示しています。そして地域の里海・里山ゾーン。剥製もたくさんありました。こういったものを展示しています。こちらはトキですね。ソフト面では講演会等を年6回程度、野外観察会を5,6回程度実施していますが、おかげさまで11年で、先月、来館者12万人を達成しました。外国からも数多くのお客さんをお迎えしています。

本館だけでは、大学全体の標本類を展示しきれいていません。1,000点程度です。大学には数十万点、数百万点の資料が眠っている。そういったものも発掘しながら、今度は学外や学内の企画展示スペースを使って企画展を行っております。広島市で実施した『豊かな里海瀬戸内海』、東広島市で実施した『明日の「さとやま」を語る』、工学部の最先端ロボット研究と昔の最先端の考古学とか、三原市ではナウマンゾウ、Wonder Seaの魅力、そういった展示会をしています。

広島大学は研究力強化事業に採択されています。約1,700名の教員がいますが、外から見ればただの山にしか見えない。1本1本の木々はどんな研究をしているのか。見えないですね。大学がこの1,700名の中から10名の特に優れた教授陣「Distinguished Professor」を選びました。そこで、我々はその先生方の展示を行いました『広島大学のチカラ Part 1』です。現在Part 4まで実施しています。

さらに、教育活動にも参画しています。標本を用いて博物館実習の学生に標本を見せて、「君たちが学外のギャラリーを借りて展示をしてみなさい」という課題を与えています。体験型実証型教育です。この写真の場合は自然史標本と美術です。自然史の標本とアートの写真を融合させて展示を考えてみよう。もちろん美術系の学芸員と自然系の学芸員は意見が食い違います。そこのぶつかり合いからどう合意形成を図っていくのか。そういったところまで含めて教育をしています。

こちらは過去6年の実績です。総合博物館本館の来館者数7万人、平均11,000人ご来場頂いています。東広島市は立地はよくないですけども、そこそこ来ていただいているのかなと思っています。企画展は、広島市・福山市・三原市・東広島市で実施し、約3万人程度。出前博物館もどんどん打って出しています、6回で7,100名。講演会26回1,400名程度、野外観察会32回、1,400名程度。教育活動は、学芸員資格取得特定プログラムの中核として、現在学生が204名登録しています。さらに新入生向けに、大学について学ぶ教養ゼミも実施しています。大学の歴史、地域の自然について学びます。この教養ゼミの第1回目は当館が各学部広報を行い引き受けています。こうした形で76件、1,229名。新入生の50.4%が見学している計算になります。このような活動により、広島県民283万人のうちの25.8人に1人は博物館を利用した計算になります。次に研究活動ですが、個々人が研究費を獲得して海外ジャーナル等にも論文を掲載しているという形です。博物館としては、『博物館研究報告』というものを出してリポジトリにも掲載をお願いしています。今年は11本の論文がでています。さらに学術標本資料の収集保存管理も進めていまして、2015年には『広島大学所蔵標本資料1』という、100ページほどの冊子を発行させていただきました。計数すると約125万点の学術標本資料がありました。実はこの中には被爆資料も一部入っているのですが、医学部にはもっともっと被爆した資料があるということが分かってきました。やはり続編の2号を作って、そういったものもしっかり公開をしていかなければいけないかなと思っています。

このような活動をしていきますと、マスコミにはかなり取り上げられます。地域の新聞をはじめ、2011年から2016年の6年間で125回、年平均で20回程度マスコミには出ていますね。だいたい、4～5段分くらいの掲載面積ですね。名刺1枚の新聞広告を打とうと思ったら約3万円かかりますので、かなり費用対効果は良いのではないかなと思っています。これも博物館という名前の親しみやすさがあるのではないかなと思います。

過去6年間の活動成果の概要ですが、研究面では科学研究費補助金を4件獲得しています。あとは広島大学地域貢献研究3件、広島大学総合博物館研究報告も毎年発行していまして、広島大学所蔵標本資料の発行、こちら

#### 研究成果・学術標本の公開・常設展示



#### 1. 過去6年間の実績(2011-2016年)

- 01 展示
- ・総来館者数(本館常設展) 70,732人 平均11,789人/年
  - ・企画展(広島市、福山市、三原市、東広島市) 28,987人/7回(年1回開催)
  - ・出前博物館(竹原市、東広島市ほか) 7,166人/6回
  - ・講演会 1,388名/26回
  - ・野外観察会 1,363名/32回
- ▶ 広島県民(283万人)の25.8人に1人が博物館を利用
- 02 教育
- ・全学の「学芸員資格取得特定プログラム」の中核(2012年-) プログラム登録学生 204名(2016年度実績)
  - ・教養ゼミ 1,229人/76件
  - ・新入生の約50.4%が見学(2016年度実績)



はWebでも公開をしています。朝日新聞社の大学ランキングというものがあります。その中で大学博物館ランキングというものが出ました。それ以降出ていません。大学博物館総合部門で当館は15位。またまた微妙な数字ではありますが、国立大では8位になります。私はスペース、資金のないなか、よくやっているのではないかと嬉しく感じています。概算要求で5億から50億円もらってできた大学博物館が実は10館あります。そのうち2館よりもランキング的には上位にランキングされました。

地域貢献活動も様々な活動をさせていただいています。環境省広島事務所研修会、自治体の科学の祭典での講演、広島県の環境講演会、環境省の観察会等々、私だけでもこの6年間で27回こういった講演会・研修会に登壇させて頂いています。

さらに、地域貢献研究という話をさせていただきました。博物館は、図書館もそうですけども窓口があります。土曜日も開いておりますので、そこには多くの地域のお客様が来られます。その中で様々な要望を引き受ける立場になります。その中で地域のお年寄りが「先生、オオサンショウウオの調査をしてくれませんか」と。お年寄りの話ですと「市町村合併により、僕たちがオオサンショウウオが生息していると言っている情報は県や国に届かなくなって、オオサンショウウオが住む川がですね、天然記念物ですから彼らのためにうまく守られなければならないんですが、コンクリート3面張り2面張りに突然されてしまう。これは情報が無いから、届いていないから。そして一緒に調査していた仲間はみんな高齢化で亡くなってしまって、もう私も87歳なんです。」と。そういう方が博物館に来られました。じゃあ何をお手伝いできますかと何うと、「調査してほしい」と言われました。それでは学生を連れて、地域に出しましょう。さらに博物館にたくさん来ていた地域の人たち、元気なお年寄りがたくさんいたんですね、そういった方たちと学生を組織して調査をはじめました。調査で分かったことは学生や地域の方に学会で発表してもらいました。そういった活動を6年間やっています。地域と大学と、天然記念物ですので文化庁の許可が要ります。なので教育委員会とも連携をして毎回調査には立ち会ってもらっています。予算的な補助もして頂いています。この3者がうまく連携をして、6年間調査を行っています。

オオサンショウウオは沢山生息していましたので、じゃあ、ここからは我々にお任せください。博物館、広報が得意ですね。ですので、博物館と教育委員会が協働して観察会を定期的に開いています。こちらの写真は、より広域の子供たちに向けて行った観察会ですね。さらに、出前授業。こちらは私が地元の小学校に行って。少子高齢化でどんどん人がいなくなっていく。将来を担うのは子供たちです。その子供たちに郷土愛を育みたい。悲しいことに地域のお年寄りはみんな、この町にはなにもないんだと子供を育てているんですね。そうじゃない。そんなことを言って育った子供が、この地域に戻りたいと思いますか。違いますよね、この場所はなんて素晴らしいんだ、その良さを伝えていきましょう。語り継いでくださいと。座学では必ず地域のお年寄りからこの地域の良い話をしてくださいとお願いをしています。そして実際に子供たちは川に入る。これを年4回程度やっています。こういった授業を行っていく中でいろんな課題が見えてきました。そして、教科書がいるねということで教科書を作りました。『オオサンショウウオがいるらしい』。表紙のイラストは、実はその博物館に来られたおじいさんのご自宅なんです。実は残念なことに去年亡くなられました。5年間一緒に調査をさせていただいて、オオサンショウウオがこの（イラストの）中には100匹いる。「オオサンショウウオがいるらしい」が「オオサンショウウオがこんなにいる」になってほしい、という思いを込めて、卒業生がデザインをしました。そして東広島市教育委員会が1万部製作・販売をしています。市域全小中学校の学級図書に選定をしています。さらに我々は研究をしていますので、この写真のような両生類の国際シンポジウムで学生と地域の方々と一緒に連名で発表する。そうするとこのように外国人も、生息地に見に来てくれました。こういった外国の方々が、この地域に来て、飛んでいるトビを見てびっくりする。あれはコンドルかと。田んぼを見て、あれはライスフィールドかと。そんなこの地域では普通のものが、外国人には評価されることを地域の人が驚くわけですね。あの赤い瓦はなんだと。「この辺じゃ普通じゃがのー」っておじいさんがおっしゃるわけです。いやいや、世界的に見たらここがすごい。この小さな川に世界最大の両生類、生きた化石とも言われるオオサンショウウオがいるんですよ。日本固有種で、それも東日本には見られないんですよ。そのすごさを皆さんに理解して頂きたい。この点は我々研究者が言うしかないんですね。そこは非常に大



きな一歩かなと思います。このような形で、マスコミに取り上げられることも非常に多いです。大学と地域一丸という形で、マスコミには本当にいつも5段6段もの面積で大きく取り上げていただけて感謝をしています。オオサンショウウオの活動だけで6年間で39回の新聞掲載、24回のテレビ放映につながっています。

このような活動をしてきましたけれど、予想外の成果もどんどん見えるようになりました。調査に参加していた学生が、平成24年度地域課題研究懸賞論文へ「東広島市豊栄町に生息する国の特別天然記念物オオサンショウウオの保全に向けた実践的研究」という題目で応募したところ、なんと最優秀賞を頂きました。さらに予想外の成果その2として、環境省による「生物多様性保全上重要な里地里山」に選定をして頂きました。オオサンショウウオの繁殖地として豊栄町が選ばれました。また、東広島オオサンショウウオの会が活動の中で生まれました。会のメンバーは「全国で認められたのでありがたい、会の大きな目的は自然と調和した風景を守ること」と仰っていました。今でも活発に活動されています。こういった賞を頂いたり、こういった選定を頂くことで会のモチベーションが上がっている点は間違いないですね。さらに予想外の成果その3として、私が出前授業を行っている地元の小学校が、去年環境大臣表彰を頂きました。こどもホタルエンジャー2015発表大会に2人の児童が参加して、「豊栄町ふるさと大好き探検隊～里山の宝物を守る～」と題して発表を行ったところ、全国46団体中最高賞の環境大臣表彰を頂きました。将来この子たちが、地域に戻ってきて我々の活動に参加してもらえればいいなと思っています。その時にはぜひ広島大学に入るんだと、しっかりと宣伝もしています。

次に、大学博物館への期待です。大学博物館はやはり、「知の集積」である大学の学びのショーウィンドーですね。先ほど全国の私立大が大学博物館を作っていると言いました。多くの大学で博物館は“武器”だと思われていますね。こんな広告塔はない。大学に眠る資源を公開する責任もある。やはり地域に訴えるには、こんないい手は無いんだということで、学びのショーウィンドーとして扱われていると思います。先日、某全国番組にも、私立大学や国立大学の博物館が特集されていました。大学と地域の架け橋ですね。架け橋的な地域貢献をやらせていただいていますけれども、こういった活動にはやはり問題関心の共有を通じた同期化、シンクロが非常に必要かなと思います。地域のコーディネーター的な役割も必要かなと。これは博物館のスタッフだからできる、研究者だからできる役割かなとも思っています。

最後に課題になりますが、こういった活動というのは定型業務ではない。オファーへの対応が基本です。我々、研究者は実はこういう活動を行ってもほとんど評価されません。大学の中では論文書いてナンボ、学生に教育してナンボ、と言われます。広島大学の場合は個人評価で点数化されます。外国語論文で1本100点とか、外部資金10万円で1点とか。なかなか評価されませんが、博物館はやはりこういった地道な地域貢献活動をしていかないといけないだろうと思います。しかし、業務の多忙化、複雑化をもたらすのは間違いありません。本来業務とのかねあいもやはり出てきます。3Sとよく言います。スタッフ、スペース、資金の不足とも言いますが、そんな中でも、何が本当に大切なのか業務をしっかり見直して、資源の重点配分、この見直しとミッションの再定義を行って、本来的な役割・機能を十分に果たしながら、こういった地域貢献活動をこれからも続けていければと思っています。以上で私の方のお話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。



#### 大学博物館への期待

- ・ 大学博物館は「知の集積」である大学の学びのショーウィンドー
- ・ 大学と地域の架け橋

- ◎問題関心の共有を通じた同期化、シンクロ
- ◎地域のコーディネーター的な役割





## 5. 事例報告『山口大学総合図書館「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」の図書館として』

(山口大学総合図書館 日高 友江)

こんにちは、山口大学総合図書館の日高と申します。どうぞよろしくお願いいたします。私からは、山口大学図書館のお話をさせていただきます。

図書館の話をする前に、大学の図書館というのは大学の中にあるものですので、まず山口大学がどういうところかというお話をさせていただきます。山口大学は現在9学部8研究科がございます。そこで、1万人以上の学生が学んでおります。キャンパスが3つございます。ここ山口市には吉田キャンパスがあり、隣の宇部市には医学部の小串キャンパスと、それから工学部の常盤キャンパスがあります。この3つで、山口大学のキャンパスは成り立っています。留学生が年々増えておりまして、現在約400名。大学がグローバル化というものを進めておりますので、だんだん留学生の数も増えてきております。そして「発見し、はぐくみ、かたちにする知の広場」というのが、山口大学の理念です。山口大学の図書館はこのような大学の中にあります。

図書館のお話に入りますけども、キャンパスが3つあるので図書館も各キャンパスに1つずつ、3つございます。総合図書館、医学部図書館、工学部図書館。この3つで山口大学図書館が構成されています。総合図書館はこの3館の中で一番大きい図書館になります。医学部図書館、工学部図書館は規模が総合よりも小さいのですが、それぞれの専門分野の図書が揃っています。山口大学全体で蔵書が約160万冊にも上ります。県内で最大の蔵書数になります。大学の図書館ですので、利用者は大学の構成員となる大学生、それから教員がほとんどです。年間の入館者数は約56万人、これは昨年度の実績ですが、1日平均でいうと約1700人。テスト期になると膨れ上がりますが、これぐらい利用があります。

総合図書館は2014年、3年前に改修工事を行いまして、リニューアルオープンいたしました。これが現在の総合図書館の外観です。写真の右上の方にひときわ背の高い建物が見えると思うのですが、これは改修工事と同時期に新設された6階建ての書庫になります。山口大学の前身の学校というのがあるのですが、そこから継承した資料の多くがこの6階建ての書庫に収蔵されています。少しだけ館内を紹介したいと思います。図書館というと従来は静かに勉強する場所だったり、本を読んだりとか、借りたりする場所というイメージが強いのですが、最近の大学はグループで学習する機会が大変増えてきております。先生の授業の中で、グループで課題をやってきなさいとかいう指示もたくさん出ますので、学習スペースとしての役割も持っています。大学図書館もそれに合わせて、グループで学習できるスペースというのを館内に設けました。アカデミックフォレストという場所です。机や椅子に全部キャスターが付いておりまして、グループの人数に合わせて自由に動かして、賑やかに使うことができる場所になっております。この場所では、あんまり大きい声は迷惑になるのですが、声を出してディスカッションとかができるようになっています。とてもよく利用されており、学生たちの人気のスペースになっています。このスペースの中に白い壁がありますが、一面全部ホワイトボードになっておりまして、こも学生の発想で自由に使っているいろんなアイデアを広げられる場所となっています。大学の図書館というのは学生の学習を支援する役割を担っていますので、大学での教育が変化すると、大学図書館のあり方というの、それに合わせて変化をします。ですので、学生が学習しやすいように、私たちは日々、どういう風にサービスや施設を変えていったらいいのかというのを考えております。地域に、世界にはばたく人材を育成するというのが山口大学の目的ですが、これに向かって、大学の中にある大学図書館も整備を進めているところです。

さて、先ほど総合図書館には古くから継承されている資料がたくさんあると申しましたが、その中には貴重な資料が含まれております。例えば棲息堂文庫という、徳山の毛利氏で収集されたものを、一部山口大学図書館に所蔵しております。それから明倫館文庫、明倫館というのは山口の方でしたら、藩校だなと分かると思うのですが、萩藩の藩校で使われていた資料。これも山口大学の前身の学校を回りまわって、山口大学図書館にも所蔵されております。



・グループ学習のためのスペース  
・人数や目的に合わせて  
自由に机やイスを組替え  
・ディスカッションや発表の練習も



そして近世・近代庶民史料というものがあります。これはもともと農学部に分館で収集された、江戸から明治にかけての大庄屋などの記録史料群になります。山口県各地の当時の農村の状況を知るための、とても貴重な史料群です。今日はこの近世・近代庶民史料の整備についてお話をします。

いまこれらの資料というのは、もともと農学部に分館で収集された時の木箱に入っていたのですが、保存のために中性紙の紙袋と、それからこの段ボール箱に入れまして、図書館の中にある貴重書収蔵スペースに移しております。帳面のようにまとめているものもあるんですが、手紙とか証文のように紙切れただ1枚のものもガサッと入っていたりして、とにかく膨大な数、点数があります。いまからもう50年前になりますが、農学部で作られている冊子目録があります。ただ、これは数点をまとめて目録化していたり、未掲載のものもまだあるようですので、1点1点の詳細な目録というのは現在もまだできていないような状態です。このような状況の中、庶民史料群の中で最もボリュームが大きい小郡の林家の文書につきましては、教員とそれから図書館のOBの多大な協力を得まして、1点1点の目録を取りまして、そのデータベース化が完了しました。現在山口大学の図書館ホームページから公開しており、皆さん自由にご覧いただくことができます。通常の本とか、普段私たちが使うような雑誌とは異なって、古い特殊な資料ですので、こういったデータベース化をするに当たっては、資料を扱うための知識であるとかはもちろんのこと、人とか時間っていうのがかなり必要になりました。これも足かけ10年かかってようやくこの形になった、ということです。



大学図書館では、大学の教育が変わるとその変化に合わせていろいろ対応していきます。その対応もある中でこういった資料整備ですので、どうしてもこれを専門にやっていく人がいない中では、細々とした作業にならざるを得ません。ですけれども、この資料整備が進むことで活用の道が開けてくるというのも間違いありません。実際に、データベースを見た研究者から閲覧希望も寄せられております。その研究者が資料を使って論文を書かれると、江戸から明治にかけての山口の地方の状況が、また新しい展開を見ることが出来ます。また図書館でも、ずっとではないのですが、機会を設けて資料を展示で紹介したりして、地域の方に現物を見ていただく、ということも行っております。すべての資料をこういった望ましい形で整備していく、活用していただける状態に持っていくというのは、まだまだどうも時間がかかりそうな状況ですけれども、少しずつ進めていくということが大切であって、その先にはきっと本学の理念にある知の広場、そういった知的好奇心に満ちた世界が広がっているように思います。地域の皆様にも、少しずつではありますが、大学にある資料を活用いただけるように、日々私たちは取り組んでいきたいと思っています。山口大学の図書館ですが、地域の皆様にもご活用いただけますので、もし機会がございましたらぜひ足をお運びください。私からの発表は以上です。ご清聴ありがとうございました。

## 6. 事例報告『山口県立大学図書館』 (山口県立大学図書館 町田 敬一郎)

山口県立大学図書館の町田と申します。よろしくお願いします。事例発表というよりは山口県立大学図書館の紹介になるかと思いますが、しばらくお付き合いください。私共の図書館は、宮野の桜畠というところにございます。国際文化学科の、地域の方と宮野をツアーするという企画のために作られた地図では、ちょうど図書館の基礎となりました桜園寺



内文庫が真ん中になっております。図書館は右側の方、現在南キャンパスと言われている方にございます。上の方に、今年度から北キャンパスという名称になりましたが、そのキャンパスがございます。将来的にはすべての大学の建物が、北キャンパスに移る予定になっております。宮野の非常にのどかなところにある、昔ながらの郊外型図書館といった形になっております。図書館は本館と、それから図書室がございます。本館は南キャンパスの方にあります。図書室は看護医療学科のキャンパスにあり、看護関



系の図書を主に備えている図書室になっております。所蔵資料は図書が18万冊あまり、雑誌、電子ジャーナル、データベース、それから電子ブック。現在、電子ブックを選択するために3万件余りを公開して、選定作業を来年の3月まで行っております。

大学図書館の基礎になりました桜園寺内文庫は、寺内正毅によって構想され、子息の寿一によって設立・竣工したものです。昭和20年まで開館していきまして、宮野の村民に公共図書館的なサービスを提供しておりました。それを県立大学に移管されまして、現在の図書館の基礎になっております。約2万点の資料を所蔵しております。宮野の小学生が毎年1回地域を勉強するために来学し、桜園寺内文庫も見学に来るんですが、その時の案内資料として用意している資料がございます。成り立ちから大学図書館になるまでの歴史が書かれております。収蔵資料の調査研究としては、昭和51年に国守名誉教授が初めて、資料の総合的な調査実施されています。4年前にも、当時大学におられた伊藤先生が同じような文庫の研究をされ、本を出しておられます。その他にも、内外の研究者が来館して寺内文庫の研究が行われているところです。将来的な調査研究の深化とか、電子化公開が課題となっております。

ML連携の活動として、過去5年間で紹介した寺内文庫の収蔵資料です。和装本、韓国系の本、それから夏目漱石の資料。あとは八代集の写本であるとか、なぜ寺内文庫にあるのか分からないのですが、能面とか、今博物館で展示していますニューギニア島の民俗資料などです。ニューギニア島の民俗資料については山口大学埋蔵文化財資料館のご協力により調べていただきました。

地域との共生は、大学の理念の一つということで、地域へのサービスを行っております。残念ながら館の公開はしておりますが、個人貸出をしておらず、県立図書館のYL-NETを通じた県内の公共図書館への図書の貸出サービス、といった形になっております。来館者については、看護系の職員の来館が多くなっています。大学が持っている特色がある学部の資料として、看護系の資料が使い度がある、と言えるんじゃないかなと考えております。あとは職場体験学習などを実施しているところです。

これからの図書館ということですが、まだ4～5年かかると思います。概ね2年後には図書館を北キャンパスの方に移転する予定になっております。第3次中期目標の図書館部門、そういったものを考えながら将来に向かってサービスを行っていきたくと考えているところでございます。簡単でございますが、県立大学図書館の紹介とさせていただきます。ありがとうございました。



## 7. 事例報告『至誠館大学附属図書館』 (至誠館大学附属図書館 藤本 夏美)

皆さんこんにちは、至誠館大学附属図書館の藤本と申します。よろしくお願いたします。まず、本学の沿革からお話したいと思います。本学は萩市にあり、山口県北部および島根県西部における唯一の4年制大学となっております。1999年に萩国際大学として発足し、2007年に山口福祉文化大学へ改変し、福祉の大学となりました。2014年には、至誠館大学と名称を変更しています。至誠館大学になりまして、4年目になります。開館時間は8時45分から17時30分、開館日は月～金曜日となります。蔵書数は平成28年度3月末で77,555冊となりました。入館者数が少ないのですが、本学は萩本校と、東京にサテライト教室があり、サテライト教室の方に大多数の留学生が所属しております。そちらは図書室として図書資料は設置してあるのですが、入館者数等のカウントをしておりませんので、この入館者数は萩本校のみの入館者数となります。





本学は2度民事再生を行っており、経営的にとても厳しい面がありますので、学生に対する支援にしても地域に対する貢献にしても、なるべく予算をかけずにやることを中心に行っています。学生の読書活動の推進として本読み選手権と題したものを2008年度より行っています。萩本校の学生だけではなく、東京サテライト教室の学生も積極的に読書活動をしてもらい、今後の授業に活かしてもらえるように、読書レポートを書く部門や、POPという絵で表現できるような部門等を設けて、参加しやすいような内容にいろいろ変更しながら行っています。

本学の図書館は入ってすぐのところに2階まで吹き抜けの広いロビーがあります。そこが展示を行うのにとても良いスペースということで、展示活動を継続して行うようにしています。いまご覧いただいているのは学生による展示活動です。学生が授業で作った陶器や絵を飾ったり、あと卒業制作で作ったものを展示したりしています。一番右上の人が写っているのは、学生が話している写真なのですが、これは学生がアラスカに行った時の写真を展示してほしいという希望があったので展示してもらい、アラスカに行った時の話を教職員や学生に向けてしてもらっているところです。こういった学生企画の展示も行っています。あと教員の展示もあります。研究成果だけでなく、研究とは関係のない個人のコレクションを展示希望される場合もあります。「こどもの成長と履物展」は、教員のお子さんが生まれてから大学ぐらいまでに使った靴を全部取っているのを、それを展示してほしいということで、かなりの量の靴を展示されていました。あと、展示に合わせて、過去には趣味のフルートの演奏会をぜひこのロビーでしてほしいという希望がありました。本学のロビーは飲食も可能ですし、談話もしていいようにしているので、そこでフルートの演奏会をしたこともあります。

これはML連携事業への参加で行っている展示になります。本学は山の上の方にあり、交通の便が悪く、車でないとなかなか来にくいところがあるので、展示活動にしても萩市の方に来ていただくことが難しいのですが、ML連携事業の展示では、ギャラリートークや、実際に、運動を一緒にしてみようという体験の企画もするようにしていますので、それには学外の萩市の方であったり、いろいろな方に参加していただくことが多かったの、こういう企画も展示に合わせて必ず行うようにしています。

他にも学内者だけでなく、一般の、萩市民の方の展示も行っています。萩市民の方から展示がしたいという希望があったときや、教員が学外で講師などしている会の展示を行っています。展示場所としての貸出は原則無料で行うようにしています。児童文化サークル「ピーカーぶー」という学生のサークルが行っているイベントも、図書館と共催で行うようにしています。私が学校図書館と公共図書館で児童サービスに関わっていた経験があるので、それを活かして学生の読み聞かせの指導や企画運営などの補助をして、一緒にイベントを行うようにしています。こういったイベントに参加されたあと、図書館の利用にもつながったことがあります。

これからの課題についてなのですが、まず職員の確保が挙げられます。本学の図書館は私ひとりで全ての業務を行い、運営も行っていますので、なかなか仕事が間に合わなくなり、滞っている部分が多くなっています。合わせて資料の管理も問題になってきています。書庫の整理に行こうとか、書架の整理に行こうと思ったら、事務室を空にする必要がありますので、危機管理の面でも問題になるのではないかと考えています。予算面でも、東京サテライト教室と萩本校の相互利用ができる電子ジャーナルであったり電子書籍をもう少し導入し、いま2冊ずつ買っているものを、電子ジャーナル電子書籍等で賄えば経費節減につながる部分もあるのではないかと考えていますので、そういった導入もしていきたいと考えています。ありがとうございました。



## 8. 事例報告『山口大学埋蔵文化財資料館』 (山口大学埋蔵文化財資料館 助教 横山 成己)

山口大学埋蔵文化財資料館の横山と申します。よろしくお願いします。私からは館の設立経緯に絞って説明させていただきたいと思います。

基調講演で吉光先生から話がありましたが、大学図書館は大学設置基準に基づいて設けられているので、大学による個別の設立経緯は存在しないということになりますが、大学の博物館施設はそれぞれに設立経緯を持っています。埋蔵文化財資料館の設立経緯ですが、昭和41年から本学の山口市吉田地区への統合移転工事が始まります。それまでは主にパークロード周辺、現在の山口市役所から県立美術館、県立図書館、つまりこの会場周辺に各学部が散在していたのですが、それが山口市吉田地区に統合移転を開始した。その造成工事中に多量の埋蔵文化財、いわゆる土器や石器等が発見されました。当初は緊急的な対応として教育学部の小野忠熙先生を中心に、学生らが協力して発掘調査に従事していました。翌42年には、やはり個人努力には限界があるということで、当時の学長を団長とする調査組織、山口大学吉田遺跡調査団が設立されました。この調査団は移転が完了する昭和48年まで調査を継続しています。こちらに当時の風景写真がありますが、調査団が調査を開始した昭和42年ごろの吉田キャンパスの景観になります。統合移転完了後、出土資料収蔵用の倉庫を文部省に申請して許可されました。ところがこのタイミングで、オイルショックが勃発したことから設置が延期され、さらに収蔵庫の規模も縮小されました。計画のおよそ2/3まで縮小されたと聞いています。この様な経緯で、オイルショックからしばらく経った昭和52年に吉田遺跡出土品を中心とする考古資料の収蔵庫として、資料館が竣工されました。延床面積が130㎡、おそらく計画段階では200㎡程度で設計されていたと考えられます。

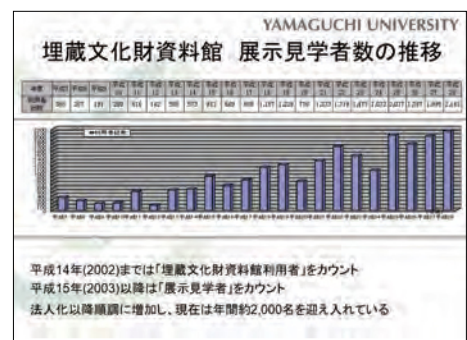
同じように国立大学が遺跡の上に立地するということはよくあることです。中四国地方を見ても、山口大学の他に広島大学、岡山大学、島根大学、徳島大学、香川大学、愛媛大学が遺跡の上に立地しています。ここで一つ強調しておきたいのは、国立大学には本学と同じように遺跡の調査組織が設けられているのですが、その多くは埋蔵文化財調査室、もしくは埋蔵文化財調査センターという名称で、博物館としての機能を意識していない組織になっていました。それに対し山口大学では、調査組織に「資料館」という名称を付け、博物館活動を行うことを前提に設立したのです。また、調査組織に関しても、多くの国立大学が開発部局の下に調査組織を位置付けたのに対し、山口大学は資料館を独立させて設置しました。これは開発の手助けをする組織ではないという意味です。山口大学として遺跡を護っていくという決意表明の上で、埋蔵文化財資料館が設立されたということを強調しておきたいと思います。

その後、規則等が設置され、昭和54年から助手1名が配置され、開発に伴う構内遺跡の調査研究を開始しました。その結果、吉田キャンパスだけでなく、宇部市の小串キャンパス、常盤キャンパス、その他にも、附属山口小学校中学校幼稚園、光市にある附属小学校中学校、そのいずれもが遺跡の上に立地している、ということが判明しまして、現在では山口大学の5地区を対象に埋蔵文化財保護業務を行っています。

埋蔵文化財資料館の転機となったのは、国立大学の法人化です。法人化に伴い、資料館が大学情報機構という部局の一組織として位置付けられました。これによって、独自予算が経常経費化されることとなり、発掘調査以外の活動も拡大していくことになりました。企画展示や市民向けの公開授業の開催、広報紙の刊行などが挙げられます。

入館者数については、法人化が平成16年なのですが、このあたりを境にやはり右肩上がりが増えていく状況です。昨今では大体年間2,000人の入館者を迎え入れています。入館者の比率を見てみると、意外と学外からのお客さんが多く、学内の利用とほぼ同等の状態が続きました。ここ2年、学生の比率が少し増えてきているのですが、これは授業の課題等で展示見学が取り入れることが増えたことによります。

資料館の現状は、スタッフとして併任の館長、副館長が1名ずつ。専





任の職員として教員が3名、全て助教です。非常勤が2名、1名は8時間雇用で1名は6時間雇用。この5名が専任で働いています。業務の状況は、館長・副館長は館の運営統括を行います。専任の教員は、当然のことですが埋蔵文化財保護業務が中心となります。その他に考古学情報の公開、資料展示であったり、資料のデータベース化などの活動を行います。あとは教育研究活動。学芸員資格課程の授業や、論文執筆、研究発表などを行っています。非常勤職員は、埋蔵文化財保護業務の全般に従事してもらっています。2名しかいませんが、発掘した資料の情報化を行っている状況になっています。

最後に課題ですが、スタッフ不足が一番大きな問題です。特に埋蔵文化財保護業務を行う人手が不足しています。本学の5地区をすべて助教3名でカバーしていますので、当然そのような状況になる。あとは予算不足ですね。特に出土品に対する処置能力が低い。出土品に対する保存処理は非常にお金がかかる事業になるので、そこが実際にはできていない。その他の大きな問題としてはスペース不足です。土の中のものを掘り出しますので、当然収蔵スペースが不足していきます。現状では学内各所の空きスペースに散在して収蔵しています。先ほどお話ししたように、展示の入館者数はどんどん増えているのですが、博物館施設のハード面ではどんどん劣化方向に進んでいる。調査組織としても博物館施設としても基幹部分が崩壊しつつある状況になるかと思います。かけ足の報告になりましたが、以上になります。どうもありがとうございました。



## 9. 事例報告『下関市立大学鯨資料室設置の経緯と概要・活動内容について』

(下関市立大学経営企画グループ長 附属地域共創センター委嘱研究員 岸本 充弘)

下関市立大学の岸本と申します。私は普段は経営企画グループ長ということで事務職員をやっております。夜の時間帯と土日に研究をやるという、本業が何をやっているのか時々よく分からなくなる時があるんですが、鯨の研究もやってまして、今さっき清水先生から博物館は知の集積だと言われたんですけども、それを言われると少し恥ずかしいと思いながら、ただ、鯨資料室という看板を掲げてますのは国内の大学でもおそらく下関市立大学1校だけですので、宣伝も兼ねてご紹介をしたいと思います。



下関市内には水産大学校がありますが、いま実は鯨の研究をしておりません。ですから私どもは経済学部単科大学なんですけれども、どちらかというと、産業面での資料収集と調査分析をしているということでございます。設置の経緯ですが、平成19年4月1日に独立行政法人化されまして、その時の目玉、というか特色ある大学づくりの一環ということで、当時の坂本学長発案で鯨資料室をつくらうという話がありました。たまたま法人化1年目に私が市の方から派遣されておりまして、大学の方で鯨資料室をつくるから家にある資料を持ってこいという風に言われてまして、それだけでできるのかなと思いながら、いろいろ市内を駆けずり回りながら資料を集めて、半年後の平成19年11月24日に開設いたしました。目的としては、ご承知のとおり下関は鯨のまちでございますので、鯨の歴史を有する下関で鯨関連資料の散逸を防ぐとともに、主に産業資料の収集ということで調査研究を行い、それを地域に還元するという事を目的としております。目指すものとしては国内外の研究者・研究機関とネットワークを構築し、鯨文化の情報発信拠点を目指すということです。規模は小さいですが志は高く、希望だけは大きくということで進めております。それから次の写真はオープニング当日の写真なんですけれども、図書館の中に学習室というのがありまして、その小さな部屋の一角を資料室といたしました。ただ鯨の頭骨とか、捕鯨母船の大型模型があるんですけども、それだけは資料室の中に入りませんでして、学術センターの1階のロビーに今も展示しております。

開設当初の収蔵品ですが、ほんとに規模が小さいということで、約



600点でスタートしました。ただ資料としましては、日本水産の捕鯨労働組合の関連の資料、これなんか実は国内でほとんど廃棄をされてる資料でして、私共の大学にしかない非常に貴重なものでございます。当時の捕鯨従事者がどんな労働環境のもと、手当てそれからどういった組合交渉をやってきたかっていう議事録なんかもすべて残ってまして、東京海洋大の先生がこれ欲しいって言ったそうなんですけれども、所有者の方が手放さず、たまたま長門に持ち帰られておったのを資料室の設置の時に寄贈いただいたというものでございます。それ以外にも加工品とか、船の模型を持っております。

鯨資料室の主な業務としましては鯨の、それからもう一つふく資料室とこのを併設しております、クジラ・フグや水産関連資料の収集も行っておりますんですけど、毎年一般市民を対象にシンポジウムを開催し、これが大学の地域貢献の一環になっております。それから捕鯨のOB、捕鯨船に乗られていたとか、鯨の加工品を作っていたとか、そういったOBの方に聞き取り調査を行ってまして、オーラル・ヒストリーという方法なんですけども、DVDを制作しましてライブラリーという形でストックをしております。それから資料室研究、紀要なんかを作っておりますし、鯨資料室だよりというものを作成し市民の方や研究者の方へ情報発信しております。

現在の資料室の様子なんですけれども、収蔵品の数が一挙に増えまして、いま約4,500点ほどございます。そのうち鯨関連資料3,000点、書籍・紙類の資料がほとんどになるんですけれども、国内唯一の鯨資料室ということで、国内外から研究者の方が来られたり、コレクターの方が来られたりという状況にあります。新たな資料として、マルハ創業者の中部幾次郎さんの、中部家の方から戦前の南氷洋捕鯨の資料、初めてマルハが南氷洋に出洋した時の海図や漁場日誌を寄贈いただきまして、分析・解析を進めておるところでございます。

鯨資料室の利用者数なんですけど、高校生が大学訪問とかで何百人単位で来られた時、資料室に来られたりするので実数はもっと多いんですが、残念なことに学内の学生の利用者はだいたい1割ぐらいしかおりません。ただ、その中でも卒業論文の中に鯨のことを取り上げてくる学生が多少出てきたことは救いかなと。非常に残念なのは本学に鯨を対象に研究している教員が誰もいないということですね。そういう先生がいっぱいしゃればもうちょっと学生なんかの取り組みも変わって来るんじゃないかと思っております。

ただ、鯨資料室自体は、資料室だけの専任職員がおりませんで、組織自体、鯨資料室自体が本学の規程の中に定められていないんです。附属機関として地域共創センターというのがございまして、そのアーカイブ部門ということで資料室を設置しているということで、センター長以下アーカイブ部門長とか職員がおりますけども、他の業務と兼務をしているという風な状況でございます。

今後の課題なんですけれども、いまデジタルアーカイブってことで、国内外の方との情報ネットワークを、本当は構築したいと思っているんですけども、金額がとにかくかかるということで、そこまでなかなか手が回りません。資料室そのものも当初設置された図書館から本館2階の方に新しく移転したんですが、それでもスペースが非常に狭い状況です。温度管理湿度管理なんかができます収蔵スペースが欲しいなということはもちろんなんですけども、年間予算もだいたい100万くらいしかございません。学芸員もおりませんので、専門職員の配置も今後の課題です。平成31年度から本学は第3期中期目標・中期計画期間になりますので、その中で何とかそういう形ができないかなあという風に考えてます。将来構想は第3期の中にいかに盛り込むことができるかということで、この資料室の在り方が今後変わってくるかなということで、できれば将来的には本当の意味での博物館法に定められた博物館のような形もできればということを目指して、簡単に説明を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。





## 10. 意見交換

【コーディネーター】  
【登壇者】

山口大学総合図書館 川上 誠  
梅光学院大学文学部 特任准教授 吉光 紀行  
広島大学総合博物館 准教授 清水 則雄  
至誠館大学附属図書館 藤本 夏美  
下関市立大学鯨資料室 岸本 充弘  
山口県立大学図書館 町田 敬一郎  
山口大学総合図書館 日高 友江  
山口大学埋蔵文化財資料館 横山 成己

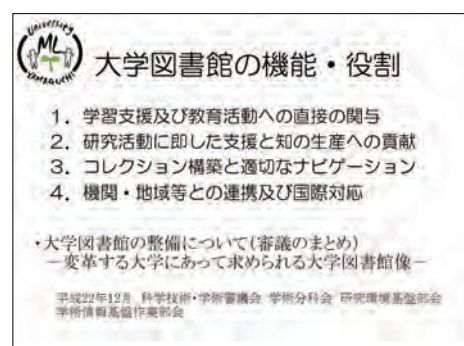


川上：ここから意見交換、ディスカッションになります。コーディネーターを務めます、山口大学総合図書館の川上と申します。つたない進行になるかもしれませんが皆様よろしくお願いいたします。今回討議すべきテーマは、地域と大学との関わりにおいて大学博物館・図書館が果たすべき責務、そして期待される役割とは何か。そして、それを果たすにはいったい何が必要か、といった内容です。重いテーマですが、いろいろな事例を見ながらお話をしていけたらと思っています。

まず、基調講演の中で大学博物館・図書館の役割がどのように規定されていたか、振り返っておきましょう。こちらは清水さんが出されていたスライドです。大学博物館の機能と役割について、基本的には学術標本を社会に発信する装置、大学と地域との懸け橋、とされていました。これに対して、吉光さんが出されていた大学図書館の機能・役割。こちらは近年求められている役割ということで出されていましたが、これまでの大学図書館は、資料を収集して、適切に使えるように、例えば分類を行って探しやすくするとか、目録を取って検索できるようにする。また、直接的に質問が来たら答えてあげる、ということを中心に行っていました。

要するに、大学博物館の役割というのはまず標本資料を収集し、保存・管理、さらに資料を調査して情報を作るところを基本とします。そして、作った情報、あるいは資料そのものを活かして大学の教育研究、さらには地域貢献等々の支援を行う。これが大学博物館の役割ということになっております。これに対して大学図書館は、資料を扱うのはもちろんなのですが、大学図書館が扱うのは、本質的には資料の中にある情報だと思っています。利用者が必要としている、もしくは大学図書館が持っている資料や情報を収集・整理・保存し、そして適切に提供する。こうした機能を基に大学の教育研究その他の活動の支援を行う。これが大学図書館の役割だったと思います。

一方、近年地域貢献ということがよく言われるようになっていきます。このシンポジウムも地域と大学博物館・図書館というテーマですので、各大学の博物館や図書館の方でどんな地域貢献活動を実施しているのかご紹介していただきたいと思います。



## ●大学博物館・図書館の地域貢献事例

川上：まず大学図書館ですが、一般の方が利用できることをご存知の方、いらっしゃいますか？では大学図書館の関係者の方で、うちの図書館は一般の人も利用できますよという所、手を挙げてみてください。意外と知られていませんが、意外と利用できるということで、大学図書館は、本来学内者へのサービスがメインですが、一般の方でも直接的に使っていただくことができます。ちなみに山口大学ですと、1年間で一般の方が13,000回くらい入館ゲートを通っている。図書も2,000～3,000冊くらいは借りられている、という結果が出ています。

先ほど事例紹介の中で地域へのサービスについて触れられていましたので、県立大学 町田さん、少し具体的にお話いただければと思います。

町田：事例報告であり適切にご紹介できなかったのですが、大学図書館と公立図書館の違いで、まず一番よく分かるのは利用者が違うということです。大学図書館は大学内の教職員・学生に対するサービスをしております。私どもの大学の理念でもある地域との共生というところで、地域へのサービスを紹介させていただいたのですが、実際うちの大学図書館は個人貸出をやっておりませんので、県立図書館のYL-NETという配送サービスを通じて、県下の図書館を通して地域の皆様に図書を貸出しておるという状況になっております。あと、来館者は看護師の方の来館が多いことは、事例報告でもご紹介したところです。その他、中学生の職場体験、あるいは小学生の地域学習に対応していることをご紹介しました。



大きく地域貢献ということを考えますと、看護学科の方で看護教員養成講習会や認定看護師の研修会を実施しております。その中で年に1コマ、図書館から情報検索あるいは資料の整理についてお話をしております。看護教員養成講習会も年1回実施しております。大学図書館として取り組める地域貢献としては、大きく考えればこういったことも含まれるのではないかと思います。とにかく、学内へのサービスがあって、その余力を以てということしかできませんが、継続的にやっていければいいんじゃないかな、と考えております。

川上：ありがとうございました。貸出だけではなく、いろいろなサービスを行われているということです。もう1つ、至誠館大学さんは一般利用者の展示をされておりますが、大学図書館で実施することは珍しいと思うので、ご紹介いただけないでしょうか。

藤本：展示活動はずっと行っていたのですが、平成20年度に利用者の方から展示を見て、自分もこういった展示をしたいのですが、この場所を借りることはできませんかという問い合わせがありました。その問い合わせを受けて館長等と協議して、「附属図書館の利用について」という、簡単なマニュアルのようなものを作り、展示期間であったり無料で展示場所として貸出するというのを決めまして、一般の萩市民の方に利用していただくようになりました。24年度までは年間2、3件は一般の方の展示があったのですが、25年度以降は展示が無い状況です。



一般の方に展示をしていただくと、普段図書館の利用ではなかなかいらっしゃらない方が、知り合いがここで展示しているからと見に来てくださって、初めて大学に来た、というようなお話もいただいたりしたので、もう少し余力ができ広報できるようになれば、また一般の方にも展示場所として貸出していることを呼びかけて、展示ができればと思っています。萩市には、こういう展示をする場所があまりないので、展示場所として萩市の方にもう少し提供できればと思っています。

川上：ありがとうございました。萩市の方にはぜひご活用いただければと思います。このように資料を貸出する、あるいは地域の方に場所を利用していただくといった各館の直接的な取り組みの他に、公共図書館と連携して活動を行っている事例もあります。こちらは山口大学の日高さん、どんなことを実施しているかご紹介いただけたらと思います。

日高：山口大学図書館では、公共図書館との連携も行っております。公共図書館と大学の図書館ではサービス対象が異なりますので、揃えている資料の種類というの也不一样です。この異なっている資料を持っているからこそ、連携することでこの資料を相互に利用すれば、双方の利用者にとってサービスの幅を広げることができる。ということ



で、それを目的に、山口大学の図書館では2006年に、県立図書館とそれから県立大学の図書館と山大の図書館、3館で協定を結んでおります。それ以降も、2010年には宇部市立図書館、それから2012年に萩市立図書館と協定を結んでおります。また相互協力の協定ではないんですけども、2016年からは山口市立図書館さんと相互返却というサービスをスタートしています。各館で借りた本をそれぞれ、例えば山口市立図書館で借りた本を山大の図書館で返せるといったような、そういったサービスをスタートしています。



こういう連携をすることで、利用者の方にとってはサービスがより充実するということがまずあるんですけども、それぞれの館の職員にとっては、例えばレファレンスでの質問に対して自分のところの持っている資料だけでは答えきれなかったりとかした場合に、協定を結んでいるところの職員の方にご相談したりすることで、他の館の職員から学ぶ機会にもなっている。先ほど人材の問題っていうのはどこの館でも出ていましたけれども、もしかしたらこの連携っていうのがひとつ、ヒトの問題を解決するような、何かきっかけになるのかな、というのも感想として持っています。

川上：ありがとうございます。会場の方に山口県立山口図書館さんの方がおられますのでご発言いただきたいと思います。協定を結んで大学の資料を取り寄せたり、大学で返却したり、という活動を行っています、一般の方からの反響などを教えていただきたいのですが。



山口県立山口図書館  
田村氏

田村：山口県立図書館の田村です。一般の方は、カウンターで山口大学や県立大学図書館の資料を借りられると言うと、びっくりされることも多く、こちらは大変助かっています。特に、県立大学の看護系の資料はこちらでも紹介することが大変多い資料になっています。ただ、貸出ができないことが残念と言われることもあります。あと、山口大学や県立大学の資料を当館がお借りする時は、翌週には貸出ができます。ですが宇部や萩以外、例えば下関の方の場合、取り寄せる時は週1回の協力車で配送するのですが、一度うちに取り置いて、配送するのが次の週になってしまう。合わせて2週間かかってしまうので、もう少し配送の便を良くしてもらえないか、と言われることもあります。いろんな専門資料をお持ちですので、紹介できるのは大変ありがたいです。

もう一つ、山大に関しては一般の利用者に貸出をされておられるんですけども、一般利用者の方への利用案内みたいなのがあるとこちらとしても助かります。例えば土日一般の方でカードを持ってない方が行かれても、その日は貸出ができないなど、いろいろ細かく変わっているようなので、その辺をホームページとかでも親切に上げてもらえるとありがたいです。でも、大変ありがとうございます。助かっています。

日高：一般の方への利用案内については、ちょっと館内で検討していきます。

川上：ありがとうございます。結構大学の資料を使いたいという方もいらっしゃるようですね。

では今度は大学博物館の地域貢献・地域連携に関する事例について、まずは広島大学総合博物館 清水さんお願いします。

清水：当館の方ではですね、広島県立図書館さんと企画展を一緒にやったこともあります。あとは、最近では東広島市の図書館さんから依頼を受けてオオサンショウウオの観察会を実施したのですが、そのあとに午後から図書館の方で今度は調べ学習会を図書館主催でやりたいと。それを夏休みの調べ学習の課題にして、レポートを出していきたいということで、そういった連携も始まっていて、我々としてもその調べ学習に参加をさせていただいたんですけども、学生とともにすごい新鮮でした。そして図書館の方々も実際に川に行って生き物を見るというのがすごい新鮮だった。こういった流れから何か新しいものが生まれるのではないかなという話も出ています。



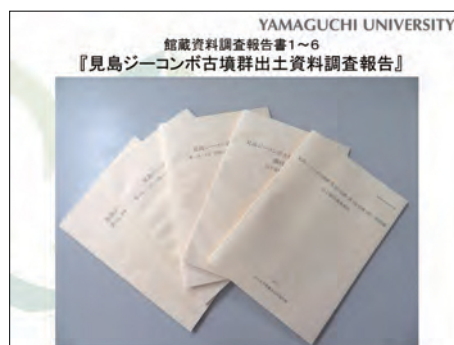
あと、当館ではないですが他の大学博物館さんは、学校支援の一環でトランクキットというのを作って図書館さんから貸し出しています。何かといいますと、学校の先生が特殊な授業、モノを使った授業をしたいけれども実際はできない。たとえばヒグマのキットを作って中に毛皮と頭骨、取り扱いマニュアルが入っていて、学校の先生がそれを

図書館に借りに行って貸し出してもらえればどこでも使うことができる。そういった連携も北海道ではやられていると伺っています。

川上：ありがとうございます。図書館とも連携しながら、地域の方との連携活動、地域貢献を実施しているということですね。では次は山口大学の事例として横山さん、お願いします。

横山：山口大学埋蔵文化財資料館の横山です。資料を作っているのでもちろんの方をご覧いただきたいと思います。

今回ご紹介したい地域貢献・連携事業なんですが、1つ目は萩博物館との連携事業です。実は、半世紀以上前のことですが、山口大学が支援した事業として山口県教育委員会と萩市教育委員会が、萩市見島の総合学術調査を実施しました。この調査の中で、現在国指定史跡となっている見島ジーコンボ古墳群という遺跡の発掘調査が行われたのですが、出土資料の調査が十分になされないままの状態になっていました。その資料は、その後山口大学と萩市の方に分有保管されていた。出土資料を半世紀放置続けたわけですが、さすがに国史跡の出土品を放置し続けるのは問題があるということで、平成22年から埋蔵文化財資料館が、山口大学に所蔵される資料を萩市に持って行って悉皆調査を行いました。その結果を調査報告書の刊行により公開し続けています。これは学術研究的な連携として重要な取り組みであると考えています。



続いてもう1例、山口県立山口博物館との連携事業になります。平成27年に山口県立山口博物館と山口大学埋蔵文化財資料館は連携協力協定を締結しました。最初の取り組みとして企画展示を平成27年度に行いましたが、その他にも遺跡巡りイベントを開催しています。第1回は平川地区、本学吉田キャンパス付近の遺跡探訪。翌年は田布施町、本年は萩市大井を巡っています。この遺跡巡りは国立大学と県立博物館の連携事業ですので、埋蔵文化財の行政スタッフが少ない地域を巡るようにしています。過疎化が進んだ地域などで、埋蔵文化財を介して地域に人々の目を向けていく、そうした活動としてはかなり有意義であると考えています。



川上：ありがとうございます。ではもう1例、下関市立大学鯨資料室 岸本さんからお願いします。

岸本：本学の場合、まず公立大学ですので、地域貢献とか地域に対する研究成果の還元というのは当たり前のことなんです。本学の場合は先ほどご紹介したとおり、毎年市民向けにシンポジウムを開催しておりまして、シンポジウムの会場には市民の方がたくさんお越しになられるわけなんですけど、この10月に実は10周年記念のシンポジウムを開催いたしました。海峡メッセ下関の国際会議場で、テーマとしては鯨とフグ、2本立てでやりました。鯨に関しては鯨油、鯨の油の利用と将来の可能性を探ということで、フグに関してはバイオマス発電の余熱を利用したトラフグの陸上養殖について、いわゆるベンチャー企業2社の方にお越しいただいて、それぞれ事例報告をしていただきました。鯨の油に関しては、下関の市内に鯨油の石鹸を製造している会社がありまして、さらに鯨の油を利用した魚の飼料を試験的に開発しております。ハマチの養殖の魚にやると夏痩せをしないというような、非常に有益なデータも得られているという風なことで、可能性としてはこういう形でベンチャー企業が、地元の資源を利用して将来の可能性をどんどん広げられるという風なことにつながっていくということを、大学としてもお手伝いをするというか、後押しができるということで、非常に有益だったなと思っております。



さらにまた非常に有益だったのは、トラフグの陸上養殖の会社の方がトラフグの餌として、鯨の油で作った餌をぜひ使いたいと、シンポジウムが終わった後そういう話につながりまして、いわゆるベンチャー企業同士の橋渡しが大学としてできたということで、私どもは経済学部ですので、歴史の検証だけでなく、そういった将来につながることに貢献できるということは地域の大学、特に公立大学としては非常に有益なことであったなという風に思ってます。

さらに過去シンポジウムなんかで取り上げた事例の中には、地元の高校生の提案を募集しまして、例えば鯨料理の



レシピを提案してもらったり、それから下関は鯨のまちですから、起爆剤としてどういう風なことをすればより発展するかということを経験を使って何か考えてほしい、というようなことを高校生の方から、逆に提案をいただいたことがあります。市民だけではなくて地元のその高校生とか学生さんとかと連携した、まち全体の取組につながるような事例を、大学として資料室として博物館としてできたということが事例としては非常に有益だったかなという風に思います。

川上：ありがとうございます。このように大学博物館・図書館それぞれ、いろいろな形で地域貢献活動をしているということです。

ところで、直接的な地域貢献以外で、資料を電子化・発信するという話題があります。従来は大学で生産される論文や報告書、紀要などは紙媒体で発行され、図書館などで見ていただくというのが中心でしたが、近年のデジタル技術の発展に伴い、学内で生産される成果物を電子化し、インターネットを通じて誰でも利用できるようにしようという、オープンアクセスと呼ばれる活動が始まりました。このひとつが機関リポジトリです。日本国内では10年ほど前から、各大学の図書館がこぞって機関リポジトリを整備してきました。本来的には研究者、大学の先生方などの利用が中心ではありますが、一般の方にも大学がどのような研究をしているのか分かるようになってきた、という意味では、ある種の地域貢献といえるのではないかと思います。機関リポジトリに入っている文献はリポジトリ自体のWebページで閲覧できる他、Googleや各種論文データベースでも検索できます。

ここでは、このたび12月4日に正式公開しました山口県地域学リポジトリをご紹介します。山口県内で発行されたいろいろな資料、例えば博物館・図書館で発行している図書館・博物館の報告書、展示会のチラシなど、従来なかなか保存されてこなかった資料を収集・保存するリポジトリで、インターネットを通じて見ることができます。学術情報のみならず、地域で生産された、地域の活動を保存し、閲覧していただくことができるようになった、ということで、ご紹介いたします。



山口県地域学リポジトリ『Yooke』  
<https://knowledge.lib.yamaguchi-u.ac.jp/>

## ●大学博物館と大学図書館の連携事例

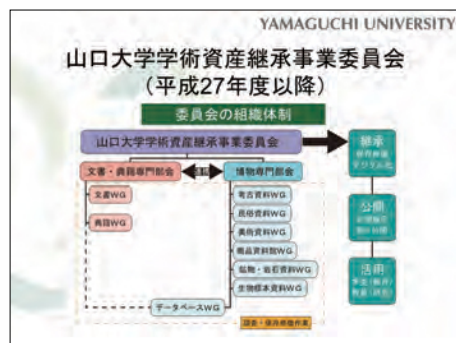
川上：このように大学博物館・図書館はそれぞれ地域に対していろいろな活動を実施していますが、ここで大学博物館と図書館の連携事例についてもご紹介いただきたいと思います。サテライト館等々のお話が出ましたので、広島大学総合博物館の事例について清水さん、お話しいただけますか。

清水：当館の場合はサテライトということで5館持っていますけども、そのうち中央図書館さんと連携をしてサテライトの一つ作っています。そこでは、動物剥製とか化石等々を展示しております、中央図書館に入って右手には化石の展示がずらっと並んでいるという形ですね。我々としては博物館に誘導するために、広島大学で一番格調高いホールがその奥にありますので、極めて良い立地に展示をさせていただいている。そして、そのサテライトの横には地域交流プラザという図書館さんが主催されている展示スペースがあります。そこで、私たちがミニ展示をするなど、過去何度か一緒に活動させていただいております。

川上：ありがとうございます。次はまた山口に戻って、山口大学の事例について横山さん、お願いします。

横山：資料を基にご紹介したいと思います。学内の博物館と図書館の連携に関する事例紹介ですが、本学の1部局として、大学情報機構が組織されています。この大学情報機構は図書館と博物館施設である埋蔵文化財資料館、ネットワーク環境などを管轄するメディア基盤センター、この3組織で構成されています。つまり、もともと山口大学では、ML連携体制がしっかりと確保されています。

この大学情報機構が管轄している全学委員会に、山口大学学術資産継承事業委員会があります。この委員会の委員長が、冒頭でご挨拶申し上げた本学の学術情報担当副学長、根ヶ山副学長になります。図書館長と埋蔵文化財資料館長も兼任していただいているのですが、その副学



長をトップとして全学委員会が組織されています。ただし、この全学委員会が実務的に何か実施するわけではありません。委員会はあくまでも決定機関であり、委員会の下部に2つの専門部会が組織されています。文字資料を対象とする文書典籍専門部会。それに対してモノ資料を対象とする博物専門部会。この部会の下に各ワーキンググループがあります。文書典籍には文書ワーキングと典籍ワーキング。博物には現在、考古と民俗、美術、商品資料、鉱物・岩石、生物標本。これらを統括する形でデータベースを作るため、データベースワーキングも設置しています。

委員会の最初の活動としては、山口大学の学術資産リストを作成しました。この委員会が設置されるまでは、山口大学にどれほどの学術資産が存在するのか不明だったからです。全学的な調査をかけ、登録されたもの1つ1つを精査し、適正でないものは除外しました。このリストは今、一般公開しています。毎年度の活動としては、具体的な学術資産の継承事業を行っています。毎年、本学から500万円程度の予算配分を受けており、その予算を用いながら各資料の保存修復を行ったり、デジタル化を図ったり、具体的な活動を各ワーキンググループが実施しています。ただ、ひとつ注意すべき点だと思うのですが、この500万円程度の予算というのは、資料の所蔵部局に配分して、ご自由にお使いください、という予算ではないのです。所蔵部局の自覚と責任を促すために、各部局に経費の自助努力も求めています。

そして、学内や学外に事業の可視化を図るため、5年前から事業成果展「宝山の一角」を埋蔵文化財資料館展示室にて開催しています。前後期入れ替える2部制をとっていますが、約4か月の会期中に毎年1,000人程度の入館者を迎え入れている状況です。その他に、博物専門部会を中心にして、大学博物館の設立計画を策定しています。こちらについては、何度も大学執行部に検討をお願いしているのですが、設立には至っていません。しかし、大学博物館の設置は今後も博物専門部会の目標として掲げていきます。

先ほどデータベース化という話をしましたが、地域学リポジトリと同様、先週の月曜日、12月4日から最初の学術資産データベースとして、考古資料データベースを一般公開しています。宣伝になってしまうんですが、各データをクリックしていただくと、基礎情報が出てきます。すべての資料について基礎文献もリンクが張られている。また考古資料ですので、実測図や遺物写真などをダウンロードできるよう工夫しています。

川上：ありがとうございます。学内の組織として一緒にしていますというお話がありましたが、同様に学内の組織として博物館・図書館が一緒になっておられる梅光学院大学の富田先生、学内の状況についてお話いただければと思います。



考古資料データベース

富田：梅光学院大学の富田と申します。まず博物館と図書館ですけれど <https://knowledge.lib.yamaguchi-u.ac.jp/arche/>も、学内に2つともある大学は山口県内では山口大学と梅光学院大学です。梅光学院大学の場合、学生数およそ1,000人の大学ですが、学芸員の資格が取れるため、博物館学課程の実習館という意味を持っています。図書館は同じ建物の中にありまして、入り口の右側が図書館のカウンター、左側の階段を上ると博物館です。物理的にも人的にも、とても距離が近く、お互いの動きがよくわかります。

先ほどの地域連携の話ですが、博物館では今年度後期に学生たちが実習で、庚申塔を調査して展示をしました。庚申塔とは、道でよく見かける注連縄のかかった大きな石です。学内展示後、UMM連携で地域ミュージアムの豊北町の歴史博物館、太翔館でも展示を行いました。その時に、学生たちが地域の方に展示解説も行いました。参加人数が少なかったという報告を聞きましたが、宣伝・広報が本当に大事ということをつくづく感じたことでした。

そして、うちの大学は2019年の春に新校舎が建つ予定となっております。場所は博物館と図書館がある建物の裏側です。新校舎が建つと逆に図書館・博物館が「裏側にある施設」と言われ始めるのではないかと危惧の念を持っています。新校舎は多くの学生たちの居場所が準備されて、今まで以上に出会いや交流が生まれる、そして学んだことを学生が発表発信するというコンセプトになっています。博物館と図書館は、どのようにすれば発表発信をする学生たちに知識を補充し、支えることができるのかということを、顔を合わせれば相談しているところです。また、博物館の資料を図書館内で見せる良い方法はないかなどと、話し合っているような状況です。梅光からは以上です。



川上：ありがとうございました。距離が近いというのはいいですね。ではもう1例、下関市立大学の岸本さん、書籍などをたくさんお持ちということで何らかの連携をされているのではないかと思いますのですが、いかがでしょう。

岸本：下関市立大学の鯨資料室っていうのはもともと、図書館の学習室を改装してスタートしたという経緯もあるんですけども、先ほどちょっとご説明しましたが、図書館が入ります学术センターの1階のロビーに鯨の頭骨とか、母船の模型とか。模型は今作ると1千万円以上するらしいんですけども、まず入ってきた学生がこれは何だっていう目で見るとすよね。なんで経済学部大学の図書館のロビーに鯨の骨が置いてるんだろう、っていうところからまず入って来るんですけども、今資料室の方は学术センターから本館の方に移ってまして、そちらの資料室の誘導の役目を果たすっていうのが一つ。それから資料室自体約2,000冊の書籍があるんですが、書籍自体の登録とか貸出は、資料室の方ではなくて、図書館のカウンターの方で処理を行っていることがあります。一部は貸出をしておりますから、ご希望の方には貸出をする。それは資料室の方では手続きはできなくて、図書館のカウンターに行ってください貸出をする、というようなことができております。そういったいろんな意味で図書館と資料室の連携というか、うまく相互作用っていう形はできてるのかなということになるかと思います。

川上：ありがとうございます。図書館・博物館の連携はいろいろな形がありますし、これからもいろいろと協力していければと思います。

### ●大学博物館・図書館の人員について

川上：さて、大学それ自体が教育研究を行い、その成果を社会に還元することが目的となっており、大学は社会貢献そのものを担っていると言えます。その中でも特に近年、直接的な地域貢献・社会貢献が求められているところではないかと思います。大学博物館・図書館はやはり学外の人から見て一番入りやすい場所かなと思います。博物館・図書館でもいろいろな地域貢献が求められ、実際に様々な活動をしているということは、これまでご報告いただきました通りです。けれども、何かしようと思うと当然コストがかかります。コストにはヒト・カネ・モノいろいろありますが、ことにヒトだと思えます。また、基調講演でもお話いただきましたけども、大学博物館・図書館の中心となる業務というものがあります。モノの情報を整理する、あるいは情報へのナビゲーションを行うという基本的な業務なくして大学博物館・図書館はありえないのですが、そこにはやはり何か専門的なスキル・知識を持った人員が必ず必要になるはず、と思っています。一方で、近年の課題は人員の不足ということで、マンパワーがどんどん足りなくなっている、業務の再編が必要、という話が出ています。

まずは現状として、至誠館大学附属図書館は一人で運営されております。私、ML連携の活動でこちらに伺って、すごくびっくりしました。至誠館大学 藤本さん、一人で運営されている状況について、お話をお願いします。

藤本：今見ていただいているのが閲覧室で、書架が並んでいます。次の写真はロビーで、展示活動などを行っている場所になります。縦に長い図書館で、手前側、入り口入ってすぐに事務室がある形になります。通常一人でいるので、基本事務室にすることが多いためカウンターは無人で、学生に呼ばれたらカウンターに出るという形になります。一人で全ての業務を行っているのですが、なかなか業務が進まないのが現実で、学生や教員からレファレンスがあったり、書籍の購入の要望があったりなどの手続きを優先して行うようにしているので、寄贈図書を受け入れであったり、書架の整理であったりが全部後回しで、積み重なってきている状態です。

本学は大学自体も小さく、職員数も少ないので、学生対応も事務局の事務だけでは賄えないところがあります。学生が行きやすいところに行き、いろんな話をしたり相談したりしているので、半日ぐらい学生の悩み相談を受けたりするような日もあり、図書館の業務は全然できない状態になるといってもあります。大学全体で職員数が少ない状態なので図書館だけ



至誠館大学附属図書館 閲覧室



至誠館大学附属図書館 ロビー

の問題ではないのですが、平成22年度からずっと1人体制でやってきているので、積みも積もった仕事がかんたん蓄積されて行っている状態ではあります。過去には学生のアルバイトがいた時期もあるのですが、今それもいない状況なので、暇そうな学生を捕まえて、ちょっと手伝ってもらうことはあるのですが、基本的には1人で全部やっています。お休みする時などは、図書館の業務とは関係のない職員が来て、カウンターに座って、貸出と返却程度はしてもらえますが、それ以外の、レファレンスであったり先生たちから研究費を使って本買いたいなどの話があったときは、明日来てください、藤本がいる時に来るようにしてくださいという風な対応しかできないので、教員や、学生にも迷惑をかけている状況にはなるので、改善できたらなあ、改善してもらえたらなあとは思っています。

川上：ありがとうございます。今のお話は職員の方からの声でしたが、実際に教育・研究を担っておられる教員としてはどのようにお考えかということで、同じく図書館職員一名で運営されている徳山大学の渡部先生、教員の視点から、コメントいただければと思います。



徳山大学図書館 渡部館長

渡部：徳山大学の渡部と申します。今年、館長になったばかりです。本学図書館は至誠館大学と同じように、資料費・人件費など、コストカットの中で運営の困難に直面している状況で、とても至誠館大学さんに親近感を覚えるんですが、教育の立場で言えば、どうしてもスタッフ寄りの感想になりますが、本学も2000年ぐらいまでは司書3人体制で、その後2、3年で2人になり、ここ12、3年は一人体制です。司書一人、館長一人で、ILLに関してだけは事務方、例えば総務課の人などが兼任で代行するという切り抜けております。夜間開館は嘱託でカバーしていますが、結局一人で回している状況で、開館中はカウンター以外の仕事はできません。本学の場合もカウンター業務の間に配架やデスクワークをやっており、いろいろな業務が切り捨てられます。レファレンスなどはほとんどできておりません。蔵書点検などは学生アルバイトを雇っております。司書に聞くと、トイレにも行けないような状況であると言っておりました。私も館長として何かお手伝いはしたいんですが、1日何回か出て決裁するぐらいが関の山で、なかなか戦力にはなりません。

本学は学生数が1,000人程度の規模で、蔵書数でいうと19万冊ぐらいです。この規模でも、実質レファレンスを含めたカウンター業が一人と、フリーハンドで整理業務をする職員が一人、最低二人で運営しないと、大学の使命である研究教育に資するような図書館運営はとてもおぼつかないだろうと思っています。それでも少ないと思いますけども、これが最低ラインだと思いますね。

今うちの専門職員である司書も今年が定年で、来年からどうしようという状況です。職員の中で司書資格を持っている方が何人かいますが、そういう人を回されたりすると、全体のコストを下げないで図書館を回すような、あまりいい状況にならないので、できれば新規採用して、教育研究に支障が出ないよう、図書館というのは本当に中核を担う部署なので、充実させたいと思っています。

川上：ありがとうございます。中核を担う部署という大変ありがたいお言葉をいただきました。図書館の事例が続きましたが、博物館の方はいかがでしょうか。横山さん、お願いします。

横山：そもそも大学博物館が無いので、あまり言うことはありません。むしろですね、山口県内で大学博物館は梅光学院大学にしかありませんので、様々な資料を抱え困っている大学とは手をとり合って、大学博物館設立を目指していきたいと思っています。人的な面では大学は専門家の、研究者・教員の集まりですので、資料に対して学術的な知見が保証されている場合が多いです。つまり、何らかの専門的な見解や資料への対処法が確保されているという意味では、大学は博物館を設立する土壌を備えていると思うんですね。一方で大学図書館の場合を考えると、このML連携事業を立ち上げたきっかけは、個人的には「大学図書館はどこにもあっていいよね」「うらやましいな」という想いからです。「博物館ないよねー、悔しいね」という。このML連携をきっかけにして、大学博物館の設立を目指そうというのが、個人的なきっかけだったんですね。吉光先生が山口大学に在職されていたころ、二人で県内全大学を回ってみました。すると、現状の大学図書館の多くは、この会場の室温と同様でお寒い限りなんですね。これは危ない。人的配置も危ういし、そう長くは持たないだろうと。そこで自分の中では一度博物館設立に向けてという想いを下





げ、図書館頑張れと。この事業を図書館復権の契機として欲しいと思い現在に至ってるんですね。そうした状況の中で、特に山口大学図書館をしても、専門性のある図書系職員の確保が難しくなっていると聞いています。参加館の中では格別に大きい組織が山口大学図書館となりますが、その図書館ですら図書系職員、専門家の確保が難しいという状況下で、どのように専門性のある職員を確保していきたいのか、していく予定であるのか、声を聴いてみたいと思います。

川上：ありがとうございます。この件に関しては私が答えるわけにもいかないので、学術情報課長 叶井課長、コメントをお願いしますか。



山口大学学術情報課  
叶井課長

叶井：山口大学図書館の学術情報課 叶井です。大学図書館、図書館の職員というのは一応専門職ということになっております。では何を以て専門家かという、大学が取り扱う、大学図書館が預かっている学術情報・資料のコーディネートをして、研究・学習に使える状態に持っていくということがあります。

学術資料といった場合に、いわゆるフローの資料、つまり世の中に現在流れている資料、印刷刊本や、電子資料。それにもう一つ、ストックの資料として歴史的な資料、一点もの、それと文書類、貴重図書などがあります。このうち、フローの資料については全体的に流通しておりますので、そのノウハウについては、図書館間の連携でも何とか維持することができる。問題はストックの資料についてですね。これは、それぞれの大学にあるものですし、歴史的なことや研究上のような過程で収集したものか、そういったことも理解した上で取り扱わなければいけない。それから、修繕・補修しコンディションを整えて、遍くは必要とされてないけれども必要なところではどうしても必要とされている、専門的な資料を守らなければならない。

そういったものは、できれば専門的に取り扱う者が長期間ずっと担当していくということが本当は望ましい。過去でしたら大学の図書館でも、就職してから退職するまで図書館一筋というような職員もいましたから、その中の誰かがそういったものも担当していたのですが、近年のように人員が削減され、流動性が高まってくると非常に難しい。これはおそらく山口大学だけではなく、多くの所で、非常に悩ましいのではないかと思います。正直言いますと山口大学でもいろいろな貴重資料を預かっておりながら、メンテナンスを適切にやっていくノウハウが途切れがちになっているという非常に危ない状態です。

このことに関しましては学内の学術資産継承委員会でも、非常に問題で、今後やって行くのに通しても、何らかの形で、専任的なポストを整えていく必要があるだろうという提言もいただいております。我々としても執行部等に、何とか配置を、ということはずっとお願いをしております。昨今の厳しい予算事情の中でなかなか話は進まないのですが、こういう問題意識については引き続き持って、何とか道を作りたいと考えております。具体的に結論が出せないところが悩ましいのですが、そのような認識と状況でありますということで、報告させていただきます。

#### ●行政博物館・図書館から大学博物館・図書館へのコメント

川上：ありがとうございます。少し暗い話が続いていますが、会場に山口県立山口博物館と山口県立山口図書館の職員の方がいらっしゃいます。それぞれ行政博物館・行政図書館から見て、大学博物館・図書館に対する期待など、コメントをいただければと思います。まずは、山口県立山口博物館 荒巻様、お願いしますか。

荒巻：山口県立山口博物館の学芸員の荒巻といいます。今日、シンポジウムに参加させていただいて、大学図書館・博物館には非常に貴重な学術資料・標本があるということを改めて知らされました。我々も、いわゆる特別展を企画するときに調査研究するのですが、必ず大学図書館・博物館に行くこともあります。学術的な、貴重な資料が、非常に大学には眠っているんだなという思いがあります。これをもっと活かせば、大学の資産にもなり、情報発信の場にもなるのかなと思います。また、今回ML連携特別展を一緒にやってきましたが、来館された方のアンケートを読むと、もっと規模の大きい展示を見たいという声もありますので、もっと展示などに活用されればいいのではないかと思います。



山口県立山口博物館 荒巻氏

もう一つ、今日のシンポジウムの中で、大学図書館・博物館の地域貢献・社会

貢献というのが一つのキーワードかと思うのですが、今日いろいろな講演・報告を拝聴させていただいたのですが、大学図書館・博物館の様々な取り組みを、あまり世間の人は知らないというのが正直なコメントです。広報ということですね。せっかくこういう貴重な活動をされているのに、世間の認知・認識が無いと非常にもったいないので、広報・発信が課題ではないかと思っております。いろんな可能性を秘めているということで、コメントさせていただきました。

川上：ありがとうございます。続いては山口県立山口図書館 田村様、いかがでしょうか。

田村：県立山口図書館の田村です。今日いろいろな大学の方のお話を聞かせていただいて、とても楽しかったです。これから大学博物館・図書館に期待するということですが、例えば山口大学図書館であれば明倫館の資料などもお持ちですが、一般の人はあまり知りません。来年、明治150年の事業もありますので、私ども県としてもいろいろ事業をしていかなければいけないので、ぜひ一緒に連携できたらと思っています。

あと、広島大学博物館ではオオサンショウウオの研究などを地域でされているということですが、県の博物館も事業で一般の方を招いて自然観察会を始めています。大学博物館・図書館でもキャンパスの案内などの時に、ご自分の所のお宝を一般の方向けにご紹介するようなイベントなど、もっともっと実施されたいと思います。

私たちは広報が下手というところはあるので、こんなものを持っているとか、こんなことをやっているということをお互い情報交換しながら、これから協力していけたらと思います。

## ●おわりに

川上：ありがとうございました。いろいろと取組の事例もご紹介いたしましたし、問題点も上げさせていただきました。最後にまとめのコメントをいただければと思います。吉光さん、お願いします。

吉光：今回のシンポジウム、特に意見交換になったときに、いろんな課題が出たと思うのですが、博物館と図書館はもともとモノと紙資料を扱い、多少業務形態は違うにしろ、いろいろなことをやっているわけです。ただ、実際には本業が少し怪しい中で、地域貢献もやろうとしているわけなので、大学の意向や社会の変化によって変動しつつ、一人図書館職員がいるように、コストの関係で人が減ってノウハウが図書館や博物館に無くなってしまうことが本当にあるのですが、やはり研究成果とかそういうものをちゃんと保存して、しっかり未来につなぐ、というのが本当の図書館と博物館の仕事なので、それが無くなってしまうと地域貢献どころではないということになってしまう。今回、本業以外に、大変な中でやっていることも、状況が悪いこともいろいろ話をしました。なので今後の活動を考えるいい機会になったのではないかなという風に思います。



特に、人が動けば、結構日本人の感覚では人の動きがコストに反映されてないこともありますが、コストがかかってしまうわけです。やはりサービス低下を解消するとか、地域貢献をしっかりやるためには、ある程度ヒト（コスト）は避けて通れませんので、できるだけ人材確保とかノウハウの収集はやってもらいたいという風に思っています。

そして、今後ML連携もできるだけ長く続けていただいて、5年後にまたこのシンポジウムが開かれるかどうかかわかりませんが、PR不足等も当然ありますので、今後PR等図って、この事業続けていければという風に思っています。何とか、図書館にしても博物館にしても、社会の基盤として、情報拠点として、引き続き機会を設けてはPRしていきたいという風に感じました。今後またこういう機会がありましたら、よろしくお願ひしたいと思います。

川上：ありがとうございます。課題がたくさんあるという悲しい事実を見ながらも、大学博物館・図書館には期待されていることも、果たしたい役割もたくさんあると思います。苦しい状況はどれも同じだと思いますが、それでも、何か続けていきたいという気持ちで頑張っていけたらなと。そして、協力しようという意志も必要だと思っています。このML連携の活動も、参加館間の協力や、状況を知る機会としても使ってもらいたいと思っています。

また、ML連携特別展に来ていただくことで、大学に触れてほしい、大学を知ってほしい、という思いで活動をやっております。ML連携展は来年度以降も続くはずなので、ぜひ各大学に足を運んでいただきたい。大学がやっていることを知っていただきたい。そして、できれば大学に少し暖かい目を向けていただければ嬉しいと思います。

まとまりが無かったかもしれませんが、これで本日のディスカッションを終わります。ありがとうございました。



## 11. まとめ・閉会挨拶

(山口県大学ML連携事業実行委員会 根ヶ山徹委員長)

---

本日は本シンポジウムにご出席いただきまして誠にありがとうございました。まずは、貴重なご講演をいただきました梅光学院大学の吉光先生、それから広島大学総合博物館の清水先生に厚く御礼申し上げたいと思います。それから、山口大学の日高さん、県立大の町田さん、至誠館大学の藤本さん、埋蔵文化財資料館の横山先生、下関市立大学鯨資料室の岸本先生には、通常業務の傍らご準備をいただきまして、また事例報告を行っていただきまして本当にありがとうございました。

本日のシンポジウムはサブタイトルに『目的と役割・現状と未来』と題しまして、大学博物館・図書館の現状の把握、直面する課題への対応だけではなく、現状の理解に基づいた今後の対応等々について考えていきたいという趣旨で開催させていただきました。時間の制約がございましたので、十分に議論が深まったとは言えないかもしれませんが、様々な形で地域貢献がなされているという事例を伺うことができました。

博物館の荒巻さん仰いましたように、大学はモノを持っております。図書館の田村さん仰いましたように、情報発信非常に下手です。そこを反省点として、今後対応していければと思っております。最後になりましたけれども、シンポジウムの開催にご尽力、またご協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。以上甚だ簡単ではございますが、閉会のご挨拶といたします。ありがとうございました。



シンポジウム会場 過去のML連携特別展ポスター掲示









### 県内13大・短大の図書館・博物館連携 県立博物館で特別展

県内13大・短大の図書館・博物館17館が連携し、特色を生かした特別展「やまぐちの大学」が山口市春日町の県立山口博物館で開かれています。24日まで、県内大学の図書館などの連携事業は2011年度に始まり、統一テーマで展

示を行ってきた。本年度は、各大学が貴重な学術資料や学生の卒業制作などを持ち寄った展示を初めて開いた。山口大埋蔵文化財資料館は、同大吉田キャンパス内の遺跡から発掘された「音替木簡」を紹介。水産大学校図書館は、航海士の育成や水産研究に貢献してきた練習船「研洋丸」の模型を展示している。

同連携事業事務局は、「各大学の特色を感じ、大学に足を運んでもらうきっかけになれば、受験を控えた高校生にも各大学の雰囲気を感じてほしい」と来場を呼び掛けている。

特別展に合わせて、10日午後1時から、県立山口図書館で大学博物館・図書館の



### 大学・短大 多様な学術

#### 県立山口博物館 県内13校の資料展示

県内の13大・短大の図書館や博物館にある学術資料を持ち寄った展示「やまぐちの大学」が、山口市春日町の県立山口博物館で開かれている。県大学M-L（ミュージアム・ライブラリー）連携事業の一端、本格的な大学入試シーズンも迫り、事務局は「選抜の参考にしてほしい」と呼び掛ける。

岩国短大（岩国市）や徳山大（周南市）の図書館などが所蔵する、学生が制作した絵画や、初めて一瞥に会

面や構内の遺跡から出土した遺物を約70点。大総合図書館（山口市）が並ぶ水産大学校下関市）は1978年から約30年間、実習に使った練習船の模型を展示している。

連携事業は2013年度にスタート。これまでは各大学を会場にそれぞれで展示してきた。今回は5回目を節目、初めて一瞥に会

山口新聞 2017年12月8日

中国新聞 2017年12月9日



山口県内の大学から貴重な品が大集合！

山口県立山口博物館・図書館など計17館（山口市春日町）で、12月24日まで、膨大な所蔵品の中から、各大学での教育、研究のための素材と学を兼ねて展示。本展には、山口県内の13大学から大学図書館

展示しています。一般向けに公開される貴重な品々が集合していますので、この機会をお見逃しなく。観覧時間は9時から16時30分までで、月曜休館。観覧料（常設展観覧料含む）は一般150円、学生100円、18歳以下及び70歳以上等は無料。また、関連事業として、12月10日（日）13時から16時まで、山口県立山口図書館（山口市後河原）でレクチャールームでシンポジウム「あなたの街の大学博物館・図書館」と題し、前中込不興と未来をテーマに、調講演や各館事例報告などが行なわれ、事業事務局（山口県大学M-L連携事務局）は083-924-6192

ほっぷ 2017年12月8日



